

第19号

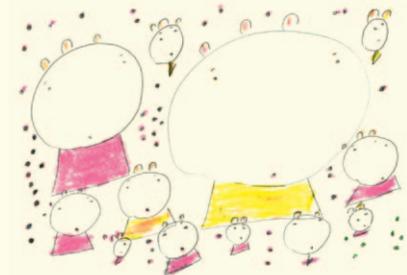
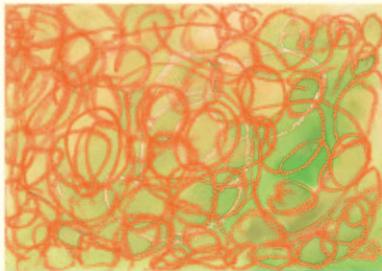


実践女子大学

生活文化フォーラム

学生の学び・地域との関わり

- I トーク×ワークショップ
男女ともに暮らしやすい「日野」の生活と私たちの心
～赤ちゃんから高齢者まで～
- II 公開市民講座
現代の生活デザイン
暮らしをデザインする生活心理
- III 保育実技研修(4年生)
「たまっ子座」公演
- IV 授業紹介
生活文化概論



I

トーク×ワークショップ

男女ともに暮らしやすい『日野』の生活と私たちの心 ～赤ちゃんから高齢者まで～

* 日野市役所(男女平等化)・市民・実践女子大学協働実施
平成26年7月31日 開催

開催会場にて 02

トーク はじめに 04

水野 いずみ 本学生活文化学科 准教授

私たちの生活と『ソーシャル・ネットワーク』

細江 容子 本学生活文化学科 教授

ワークショップ 13

男女ともに暮らしやすい

『日野』の生活と私たちの心

く赤ちゃんから高齢者までく

トーク
ワークショップ・ファシリテーター

本学生活文化学科 教授

細江 容子

ワークショップ・ファシリテーター

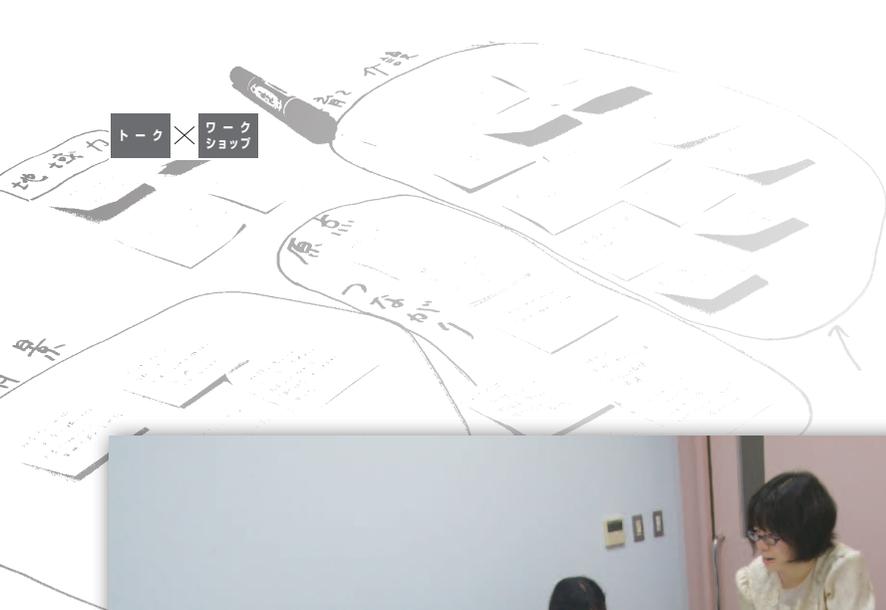
トーク&ワークショップ オーガナイザー

本学生活文化学科 准教授

水野 いずみ



開催会場にて



水野 それではお時間になりましたので、ご挨拶をさせていただきますたいと存じます。実践女子大学の水野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日はトーク、それからワークシヨップということで、短い時間ではございますけれども、このような場を設けさせていただきました。日野市の男女平等課の青木様、村瀬様には非常にお力添えをいただきまして、開催に至ることができ、本当に感激しております。本日は、それぞれの場所でご活躍されている皆様においでいただき、感謝いたします。

まずは最初に、本学の細江容子から話をさせていたただきたいと思ひます。ポストイットを一束ずつお渡しさせていただきました。しておりますので、感じたことであるとか、考えたことなど、どのようなことでも構いませんので、覚書のようなもので結構です。そこに書いていただければと思ひます。また、ポストイットにつきましては、たくさん用意してございますので、もしなくなつたというようなことがありましたら、手を挙げていただけますと助手がお持ちいたします。どうぞよろしく願ひいたします。

では、最初に、細江のほうから、「私たちの生活と『ソーシャル・ネットワーク』」という題名で三十分程度お話をさせていただきますたいと思ひます。どうぞよろしく願ひいたします。

ハッザ族の暮らしと ソーシャル・ネットワーク

細江 細江です。皆さん、本日はお暑いなか、本当にありがとうございます。

本来であればペンシルバニア大学のコリン・アピセラ先生をお呼びするところでしたが、日程調整のメールを何通も送りましたが、この夏から秋は研究のフィールドであるタンザニアにいらつしやるということで、来年の秋頃には来てくださるといふメールをいただいております、来年度講演をさせていただく予定にいたしております。

本日はそんなわけで細江が代打ということで、私の領域である家族社会学、家族関係学の領域から話をさせていただきますたいと存じます。生活文化学科生活心理専攻に四月一日付で赴任いたしました者として、この四月に新設された生活心理専攻を紹介申し上げたうえて話を始めさせていただきますたいと存じます。

きょうは、ご参加いただいた方のなかにタンザニアでお仕事をされた経験があるという方がいらつしやるということで、私よりも詳しい部分もおありかと思ひますが、お話をさせていただきますたいと存じます。

- ▶ タンザニアのハッザ族は、「平等」を大切にし、食糧や労働、子育てを分かちあう部族で、うつ病もみられません。一方、文明化された現代社会のなかで暮らす私たちの生活のなかでは、分かち合いの難しさや、うつ病など心の病に悩まざるを得ないという状況がみられます。

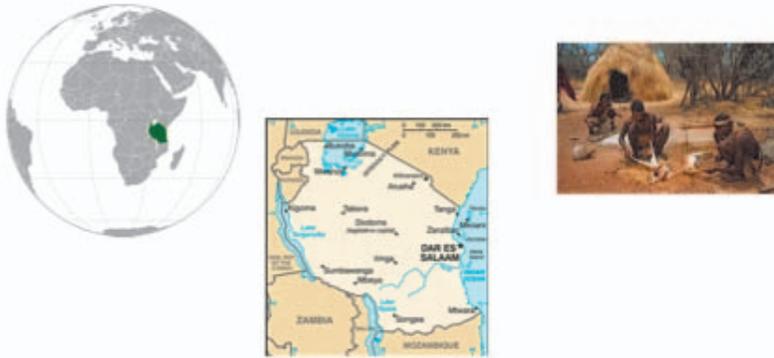


図1 タンザニアのハッザ族

パワーポイント（図1参照）、ちょっと見えにくいかもしれませんが、ワークショップのところにもありますように、タンザニアのハッザ族、平等を大切にし、食糧をともに分かち合うこと、労働と子育てを分かち合い、互いの役割関係のなかで互いを尊重し合う集団関係のなかで、うつ病がみられないのです。うつ病患者の多い現代社会は、人類がうつ病の原因を次々と抱え込んできたことに要因があるといわれています。しかし、人類はうつ病を防ぐ仕組みを持っているといわれています。タンザニアにおいて狩猟採集生活で暮らすハッザの人々にうつ病のテストを行ったところ、うつ病の人はいなかったという結果です。ペンシルバニア大学のコリン・アピセラ博士らは、役割を分かち合い、狩猟などで集めた食料をほぼ一〇〇パーセント分け合うなど、平等な暮らしで現代人の抱える悩みが無いのが原因ではないかと推測しています。

一方、文明化された現代社会のなかで暮らす私たちというのは、分かち合いの難しさのなか、心の病というふうなものに悩まざるを得ないような状況があります。パワーポイントにありますように、ここがタンザニアで、この辺りがハッザ族の暮らす場所、ちょっと見えにくいかもしれませんが、彼らの写真もあります。

フロリダ州立大のフランク・マローウ教授は、過去十五年にわたりハッザ族の調査を行い、「ハッザ族の暮らしは、遠い祖先の時代から変わっていないのかもしれない」と述べています。ハッザ族の遠い祖先は、遺伝子解析の結果をみると、十万年以

上も前の現生人類「最古」の血をひく可能性があり、現在の狩猟採集型生活スタイルは、一万年前、農耕が始まる以前に溯ることが確実視されていると述べています。二〇〇万年に及ぶ長い人類史において、その九九パーセントの間、人類はハッザ族のような狩猟採集の生活で、「定住型の農耕（牧畜）」を始めたことのほうが「ごく最近」のことだそうです。それは、人類史においては一パーセントに満たない短い歴史で、全体の長さからするとわずか一パーセントの短期間で、過去九九パーセントの狩猟採集生活をすっかり色褪せたものへと変えてしまったとのことで、非常に注目される研究とされています。コリン先生の調査では、彼らのソーシャル・ネットワークというのは、文明化された現代社会のなかで暮らす私たちのソーシャル・ネットワークと近く、そういった非常に古い生活スタイルでの生活なのですが、現代人と同じようなソーシャル・ネットワークを持っている。しかし、なぜさまざまな問題が、いまの私たちの社会、文明化された社会のほうに起きているのかというようなことを疑問点としてお話をしていきたいと思います。

今回のワークショップにおきましては、さっきお話をしましたようにソーシャル・ネットワークの構造は類比しているのだけれども、なぜ文明化された現代社会の中で分かち合いが難しく、うつ病等が生まれてしまうのか、心の病が生まれてしまうのかということが一つ課題になるかと思えます。

そして、ともに分かち合い、一人ひとりが生き生きと暮らすことができるような社会にしていくなために、どのようなこ

とが必要なのかということ、地域社会のなかで私たちは考えていく必要があるのではなからうかと思えます。そのなかで、ともに分かち合い、一人ひとりが生き生きと暮らすことができるような社会について、男女平等の問題とも関わるかと思えます。

この二つのテーマを考えながら、ワークショップのほうに結びつけていければというふうに思っております。

ソーシャル・ネットワークの構造

細江 テーマとしては「私たちの生活と『ソーシャル・ネットワーク』ということですので、いわゆる社会的ネットワークという観点で見えますと、ノード(nodes)とタイ(ties)という観点から社会的隣接性を考察するというような考え方になります。ノードというのはネットワークにかかわりをもつ個々の人々を指し、タイというのは関係者間の結びつきをあらわします。ノード、個々ですね、その間には考え得る限りのさまざまな種類の関係性、すなわちタイがあるわけです。

どういうことかといいますと、パワーポイントにありますように(図2参照)、これが個人ノードでその個々と、その関係性であるタイが強い場合と弱い場合があります。例えばこれが家族というような形であると、かなり強い。あるいは近隣関係、あるいは親族関係とかいうような形でも強い場合もあるかもしれないということ、どういった個々の関係性のなかでどういった強い関係を結ぶのか。それから場合によっては非常に弱

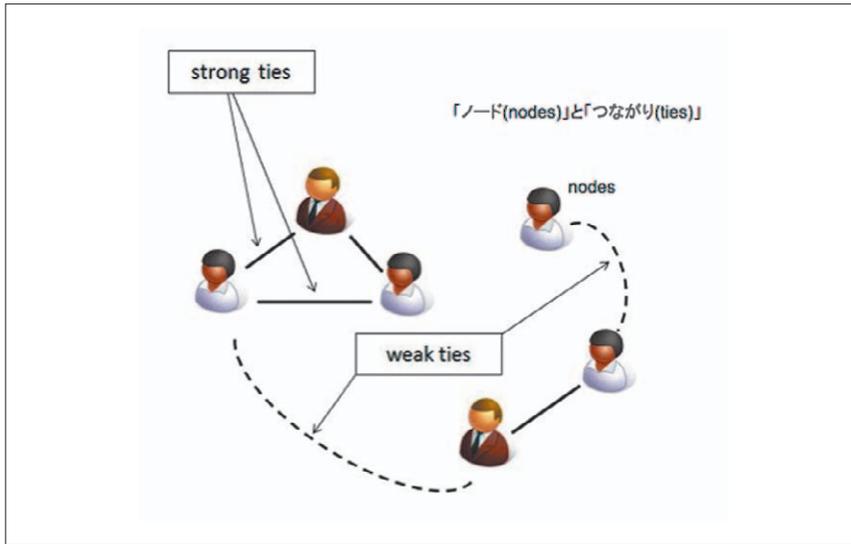


図2 ノード (nodes) とつながり (ties)
<http://www.mcschindler.com/2010/12/17/im-social-web-losen-netzwerke-hierarchien-ab/>
 (2013.5.3取得)

い関係を持ったというような形で、ネットワークが構築されていくということになります。そしてそのネットワークのかかわりのなかで、人々がより生き生きと安心して暮らしていけるというようなことも最近の調査の結果では出てきております。ですので、いかにソーシャル・ネットワークをうまく構築していくのかというようなことに関して、一つの大きな課題になってくるのだらうと思っております。

個々をつなぐ問題ではありませんけれども、集団と集団との関係の部分もあるかと思えます。この点に関しては、水野先生も日野市のところで調査やあるいは新しいそういった地域社会のなかでのネットワークをつくるというような活動をしていらっしゃるかと思うので、水野先生そういうところでちょっと、一言お話しただけでしようか。

水野 はい。私のほうは個人的な興味、関心というところからですけれども、日野市という地域でさまざまな人々が集まって、そしてそこで頑張つていらしてという様子を拝見しています。それらをつないでいくということが、実は意外と難しいと思うのですが、日野市では結構それが可能になっているところがございます、非常に可能性を感じているところです。

私は、障がい者の就労支援施設の方とおつき合いをさせていただくことが多いのですが、障がい者就労支援施設のご関係者が、そのなかだけでとどまらずに、非常に多様なグループとどうか、多様な集まりの人々とアメーバのようにつながっていく様子を間近に拝見させていただいて、とてもエキサイティン

グに感じています。

細江 水野先生、ありがとうございます。水野先生の地域社会のなかでのいろいろな活動を拝見させていただいて、きょうのところと結びつくのだろうと、急にお話をふってしまいまして、申しわけございませんでした。

では、進めさせていただきたいと思います。

ソーシャル・ネットワークに関しましてなのですけれども、可能な限りのノードを適切なつながりで全て結んだ地図というような形がソーシャル・ネットワーク、社会的ネットワークという形になるということです。そうするとネットワークは関係する個々人の持つ社会的資源、これについては後でも少し説明をしたいと思うのですけれども、いわゆる広義の社会資源（社会的資源の種類として、経済的資源（金や物）、関係的資源（人脈やコネ）、情報的（文化的）資源（教養や学歴、ソーシャル・キャピタル））の中のソーシャル・キャピタルというものを決定づけるときにも用いられております。これらの概念というのは、しばしば点と線というような形で個人の、あるいは場合によっては全体のというようなことになることもありますけれども、点と線をつないでというような形での社会的ネットワークのダイアグラムとしてあらわされるような状況です。そうするとそういったネットワークの状況が個人の、あるいは場合によっては集団というふうな形で述べている先生もいらっしやいますけれども、個人のウェル・ビーイング（well-being）というか、福祉・幸せにかかわってくるというような形にな

るかと思えます。

特に後で家族のお話を申し上げますけれども、ひとり暮らしの高齢者や、あるいはひとり親家庭の家族が増えているような状況のなかでは、いかにして点と点をつないでいくことができるのか。あるいはそれを一つの、さっき水野先生がおっしゃったようにアメーバのようにいろいろな形でうまくつなぎながら、人々がよりよく地域社会のなかで生活できるようにしていけるのが、大きなポイントになってくるのだろうというふうに感じております。

地域社会の役割

——日野市の場合

細江 一つ、ソーシャル・キャピタルという話に関しては、人と人との間に存在するもので、具体的な内容としては、信頼とか、つき合いなど人間関係、あるいは中間集団、すなわち個と社会の間にある地域コミュニティの組織だとか、ボランティア組織というような、いわゆる中間集団、という三つを含むこととなります。やはり人間ですので、非常に信頼関係というか、他者への信頼というのがすごく大事なだろうというふうに定義的にも書かれております。いかにして地域社会のなかで他者との信頼関係を持ちつつ、いろいろな人間関係を形成していくのか。それから、いかに個人と社会の間にある地域コミュニティの組織や、ボランティア組織というようなものとかかわらせながら見ていくのかというのが大事になってくるかと思

ます。ですので、やはり人としていかに生きていくのか、いかに信頼して他者とかかわりながら、他者を信頼して生きていくのかということです。そこが大事なポイントになってくるのだろうと思っております。

OECD（経済協力開発機構）のソーシャル・キャピタルの概念というところで考えますと、「グループ内部またはグループ間での協力を容易にする共通規範や価値観、理解を伴ったネットワーク」というふうに定義しております。

多分先ほど水野先生もおっしゃっていらしたかと思いますが、日野市は、人々の信頼関係とか、あるいは地域における行政との信頼関係とかということが古くからある地域社会なのだろうというふうに感じております。私も四月一日付でこちらに赴任したので、まだ十分ではないのですが、あちこちを拝見させていただいたりとか、いろいろな方々とお話しさせていただいたりというなかでの、そういった非常に大切な部分というのが既にある地域社会ということを感じております。

そのうえで、さらにさまざまなネットワークをつくりながら、例えば高齢者の問題であるとか、あるいは障がい者の問題であるとか、あるいはひとり親家庭の問題であるとかというような課題に対し、さまざまな人々に対し、さまざまなネットワークを張りめぐらすというか、ネットワークを築き上げていくということのなかで、個々の人々が点在しないような状況をつくり出していくことができるのではなからうかと考えております。そのなかで、人々がより幸せに暮らす地域社会をつくり上げる

ことができるのではなからうかというような気がしたりしています。

OECD、定義的な部分ですけれども、市民同士のコミュニケーションの密度だとか、市民と行政のパートナーシップとというのが活発であるほど豊かな社会が形成されるというように考え方があって、こういった考え方に基づきますと、先ほどお話を申し上げましたように日野市ではそういったものがあるのだらうというふうに想定いたしております。それがないと、そこからやはりいろいろなものを築き上げていかなければいけないという問題で、そういったことがベースにある地域社会ということになれば、非常に安心してさらなる行動といったものも可能になってくるのだらうというふうに思っております。

ソーシャル・ネットワークのあり方

細江 社会的ネットワークのあり方ということに関しましては、一つはより開かれたネットワーク、それがすごく大事であって、かなり密で閉鎖的なネットワークよりも、より開かれて、より多くの新しいアイデアや機会に恵まれるような、だから多様な人々が参加できるような、そういったネットワークを形成するということがすごく大事になってくるだろうと思います。かなり緻密で閉鎖的なネットワークであると、閉じたままですのて新しい知識、アイデアが入ってこないということになります。ネットワーク自体というのが、委縮という言い方はよくないか

もれませんけれども、うまく活動範囲を広げサポートして行くことが十分にできないようなことも出てくる。他の社会的なかわりを持つ個人の集団は、より広い範囲の情報にアクセスすることができるといふことですので、同じような知識や機会ばかり共有しているような集団でなく、もつと多様な人々が入れるような、そして多様な情報にアクセスできるような、より広い社会的ネットワークのあり方というのが大事だろうと思います。例えば高齢者をサポートするというのでも、閉じた集団であると、例えば介護の問題なら介護の問題に特化してしまうわけですけども、個人の生活というのを考えたときには、個人の生活は多面的な側面を持っておりまして、その全体を考慮しながらさまざまなネットワークを用いて個人をサポートしていくということの意味はとて大きいのだろうと思います。

いかにしてうまくつないであげられるかということが大事になってくるのではなからうか。さまざまなネットワークのつながりを持つほうが、個人や集団が何かをなし遂げるときにより有益であるというふうな解釈ができるということになるかと思えます。柔軟に対応ができるようなネットワークのあり方というのが非常に大事なものでだろうと、特にいまの時代はそういったことが大事になってくるだろうと思っております。それは研究知見などに出ています。

家族形態の変化とともに

細江 「私たちの生活と『ソーシャル・ネットワーク』ということですので、私たちの生活ということを考えてみますと、家庭生活の進展のなかで家事とか、子育てとか介護というようなものが社会化されてきております。

社会化されるということはどういうことかといいますと、クリーニングでも、ハウスクリーニングでも、食事の宅配でも、ベビーシッター等、それから各種介護サービス等でも社会化されるということは、お金を払ってサービスを購入するという形になってくるわけです。そうするとお金があるか、ないかによってサービスの購入度合いが違ってくるということになりますと、個人の生活の質ということがお金があるか、ないかによって規定されていくというようなことが出てくるわけです。

しかしながら、もちろん持てる高齢者が多いとは思いますが、けれども、非常に生活に困窮した、特に女性は配偶者が亡くなってひとり暮らしになると経済的に困窮する場合も多いわけですので、そういった面でのサポートというのが大事になってくるだろうと思えます。そういった形であったり、あるいはひとり親家庭へのサポートであったりとか、場合によっては障がい者へのサポートであったりということを考えますと、金銭でサービスを買える人たちにとってみれば問題ないこともあり得るわけですけども、そうではない人たちには、さまざまな問題が出てくる。金銭では買えない部分というのももちろんあるわけ

で、そこをどういうふうと考えていくかということも必要になるだろうと思います。

家族の変化ということについて少しお話を申し上げておきます。これは皆さんもよくご存じだと思いますけれども、人口減少のなかで、世帯数の減少というのが、急激な減少というわけではないということは、ひとり暮らしというか、単独世帯が多いというようなことにもなっているわけです。世帯構成の変化ということを見ますと、単独世帯の割合がふえておられますし、それからひとり親家庭もふえています。全体的にこういった状況にある家族ということですので、そういった家族に対してのサポートも必要になるかというふうに考えておられます。

生活資源ということを考えますと、経済資源、それから生活時間資源、生活空間資源、それから人間関係資源、いわゆるソーシャル・ネットワーク的な側面ということ、それから能力資源というものがありません。

経済資源は皆さんもご承知のように収入であるとか、貯蓄などの金銭であるとか、場合によっては金銭と交換できるような車とか住宅というようなもの。それから生活時間資源というのは、自由に過ごせる時間、あるいは仕事をする時間とか、地域活動ができる時間とかというような、いわゆる生活時間を指します。ですから生活時間の中で地域、場合によっては地域の人を巻き込み、ということですので、その地域活動のできるような時間ということを見るとワークライフバ

ランスの問題も出てくるかと思えます。それから生活空間資源というのは、静かな空間資源ということを考えますと、住宅の周囲環境であるとか、住宅の広さであるとかということですね。動的な空間資源ということになりますと、活動空間の広さですので、旅行に出かけたりとか、あるいは地域をまたぎながらいろいろな社会活動をしたりますとかというようなことが含まれています。人間関係資源は、ソーシャル・ネットワークというように、能力資源というのは個々の人たちが持つ知識や技術ということですから、もちろん本人の健康であるとか、体力であるとかも含めた資源、そういったものが含まれるということです。

ですから、生活資源、個々の持つ生活資源といったときに、こういった経済資源や、生活時間資源や、生活空間資源や、能力資源といったものを想定しながら人間関係資源というものをいかに考えていくのかというのがすごく大事なことになるのだらうと思っております。

ソーシャル・ネットワークと心の関係

細江 ソーシャル・ネットワークの議論に関して申し上げますと、大体これまで二十五年にわたってソーシャル・ネットワークに関する大きな研究の成果が出ているのですけれど、その研究成果から、社会的な結びつきや、連携というかそういったものがさまざまな理由で心身の健康に強い影響を及ぼしているというように、いわれております。ですので、ソーシャル・

ネットワークというものに関していえば、私たちの生活とか心身の健康ということに関して、私たちのウェル・ビーイング (well-being) を追求するということに関してすごく大事なキーワードになってくるのだろうと思います。

さらにつけ加えますと、最近の公衆衛生学的な領域研究というのは、社会的なネットワークのサイズとか、その強さとかいうのが人々の行動、心身の健康に強い影響を与えているというような予測が可能だという結果が知見として出てきております。ですので、人々の幸せであるとか、精神的落ち込みであるとか、場合によっては肥満とか、喫煙とか風邪といったもの、公衆衛生ですからそういったところともかかわってくるというような研究結果が出ております。

最後にこの図をお示しして終わりにしたいと思います。

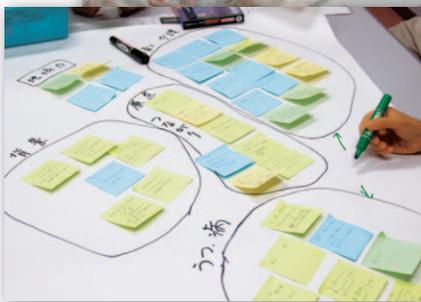
潜在的な問題はちよつと見えにくいかもしれませんが、いわゆるコミュニティをめぐるところのさまざまな問題、そういったものが発生するということを考えますと、そういった問題の顕在化といったことにかかわっていえますことは、先ほども申し上げましたように、人々のふれ合いの機会、いわゆる人間関係の希薄化といった問題がかかわっている点です。こういった形でそれが顕在化してくるのかということとかかわってくる問題なのだろうというふうに思っております。

与えられた時間が十分ぐらいということですので、簡単にお話を申し上げまして終わりにさせていただきますと思います。

ここで喉を潤していただいて、キャンディーなどを食べていただいて、その後またワークショップということで進めさせていただくわけですので、私の話はこれで終わりにさせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

水野 細江先生、ありがとうございました。



トークの後のワークショップでは、参加者による活発な意見交換が行われました。

「赤ちゃんから高齢者まで暮らしやすいまち」
を考える

水野 トークの最後に細江先生がお示しくくださったように、現在は、例えば日野市というコミュニティのなかで、問題が顕在化してきているという状態かもしれません。ですが同時に日野市にはさまざまなソーシャル・キャピタル、社会資源があると実感しているところがございます。今回は、「高齢男性の「じこもり」、それから「DV・虐待」の二種類をキーワードにしながら、この日野市という場所で、今後、どんなことにどのように取り組んでいけばいいのか、あるいは日野という場所をどういうふうに捉えていけばいいのかなどの観点から、引き続きワークシヨップを行えたらと考えております。ワークシヨップにつきましては、いまお手元にございますポストイットのご記入内容に基づいて、二グループに分かれて作業を進めたいと考えております。その際には細江と、それから水野がそれぞれのチームには私どもはファシリテーターですので、皆様ご自身の、それぞれのご意見を、グループで取りまとめられるような形でファシリテートを行いたいと考えております。

まず、グループ分けを行いますので、もしどちらかのキーワー

ドを希望するというようなことがございましたら教えていただけるとありがたいです。どうでしょうか。また、先ほどのトークでも異なる集団とのやり取りが重要というふうにお話がありましたから、できましたら同じ所属機関の方は二手に分かれるとよろしいかと思えます。

では、これからワークシヨップを始めたいと思えます。ポストイットに書かれている枚数は異なっているかと思いますが、一向に構いません。まず、お書きになっているポストイットを模造紙の上に載せていただきまして、同じグループの方々と内容を共有いただきたいと思えます。そしてそのうえでほかの方々の書かれている内容と見比べていただいて、同じような内容のものをなるべく近くに貼りつけていくという作業をしていただきたいと思えます。そういったしますと、恐らく似たような内容で幾つかの意見の固まりができてくるかと思えます。ある程度意見の固まりのようなものができましたら、「では一体この意見の固まりはどのような概要を示しているのだろうか」と各グループでお話しいただきまして、意見の固まりに名前をつけていただければと思えます。もちろん話をされているなかで、新たに思いついたことなども、どんどんとポストイットに書き込んで貼っていただいて構いません。また、本日はいろいろな色のペンも用意してございますので、模造紙にそのまま書き込んでいただいても構いません。大体十五分ぐらいを目安にしてくださいまして、いま申し上げました作業を行っていたければと思えます。十五分たちましたら一旦ご様子をお伺いいたしますので、その

ときの状況に合わせて進めてまいりたいと思います。では、どうぞよろしくお願いいたします。

(各自話し合い・作業)

発表1

キーワード「高齢男性のじいちゃん」

男性1 発表させていただきます。私たちは「信頼づくり」という大きな中での、大きく三つのカテゴリーに分けて話し合いを行いました。

まず一つめのカテゴリーは、当たり前ができていく社会。これはどういうものかといえますと、生き生きと暮らすことですか、人間関係が希薄化している現状、またいかに他者を信頼して生きていけるか。また、異なる集団とのやり取りの大切さとか、コミュニケーションとか、そういったところに課題や理想を想定しました。

そして、真ん中にまとまっているカテゴリーは、失敗を受け入れてもらえる社会というものです。これはどういうものかといえますと、ネットワークというキーワードがかなり出ているんですけども、より開かれたネットワークであるとか、あるいはそのネットワークの柔軟性であるとか、あとはいかにソーシャル・ネットワークを今後構築していくかということ。そうしたなかで、こんな関係のなかでは失敗できないのではないかと、うまく立ち回らないといけないのではないかと、といった声があるなかで、失敗してもいいんだよというところを受け皿として整

えていく必要があるのではないかなと考えました。

そして最後なんですけれども、理想的な話です、温かさが大切だというカテゴリーです。こちらは先生のお話の中にもありましたが、個人の生活の質、これがお金の有無によって変わってきている現状があるんだということ。そして、お金で買えないものもあるんだよということ。こういった、いわゆるお金にかえられない温かさが必要になる。

これら三つのカテゴリーは全て一貫しておりまして、この温かさがあるから失敗を受け入れてもらえる社会というものが実現するわけです、失敗を受け入れてもらえるというのほただの甘えではなくて、やるべきことをきちんとしている、当たり前前のがきちんとしていくからだと思います。そういった教育がなされて初めて、こういった信頼づくりというものが満たされるのではないかなといったところが私たちのグループの発表になります。以上でございます。(拍手)

発表2

キーワード「DV・虐待」

水野 では、こちらのグループの発表をお願いいたします。

女性1 はい。まず今現在、現実はどうな感じかということ、ところで、それぞれの立場で、皆さんがいま心に思うことを挙げていただきました。たとえば、赤ちゃん。子育ての立場から、昔は断乳するときにおせっかいおばさんからこういうふうにしてからしを塗るんだとか教えてもらったという話があり

ました。また、子どもはすぐ大人になってしまうだけども、子どもは大人の所有物ではないんだから、大人が決めつけるのではなくて、いろんな選択肢をあげられるような、そんな育て方ができればいいねという子育て中のお母さんの意見や、児童館、子育て広場のことなんかも、いまはとても助かっていますなんていう意見ももらいました。そして、介護の問題もやはり、いまは大変な時代になっているんだよという意見がありました。とにかく、家族が介護、家族が子育てをしなくてはいけない、しかも女性がすべきという考えがやっぱりまだ根強いのではないかといい意見もありました。子どもたちが外で遊ばない世の中になってしまっているということについても、将来どんな世の中になってしまおうだろうという話が出ました。また、虐待の問題もふえているねという現状、現実が挙げられました。

それから、うつがふえているということや、認知症についての話もあり、そういった人たちの居場所もない、つながりもないという内容が挙げられました。産後うつのお話も出ました。皆さん、経験していらっしゃる人は、そのつらさはわかるかと思うんですけども、そういう人たちというのはやっぱり孤立しているということが挙げられました。子育て、介護をしている人たちもやっぱり孤立してしまっている。その背景にはどんなことがあるのかということ、経済的な話とか、人口と世帯数だとかの話が出ました。また、「サービス」という言葉にみられるように、お金で何でも購入できる社会になってきてしまっ

ているという話もありました。逆に原点に戻っていない。こうしたことが進んでいるがゆえに大事なことがなくなっているのではないかということが挙げられていました。いま言った原点、つながり、さつき先生が言ってくれたようなハッザ族みたいな、本当にみんなで仲良く暮らしているようなところ、そういうものが、つながりが必要なのではないかということでした。また、点と点、線というふうに難しくわざわざ結ぶ必要もなくて、そもそも世の中というのは世界中考えてみると空気でもって、もうつながっているんだよという意見もありました。宗教的なそういう言葉を聞くとやっぱり、ああ、そうかなんて安心したりもするんですけども、そういったものが原点となると思えます。そして、こちらのように意見が最後まで出まして、これからのことを考えなくてはいけない、公民協働でやっていかないと日野市は進んでいかないよという意見が挙がりました。この間、地域懇談会といって、中学校区ぐらいでしょうか、市長をはじめ地域で集まって、いろんな問題を話し合いますよというのをやったら大盛況であったという話も出ました。やっぱり地域のコミュニケーションというのが求められているのではないかと、やっぱり、市役所だけのアイデアではダメなんです。市役所はお金もないし、時間もない、アイデアも市役所だけでは足りない。だけどニーズはふえている。そうするとみんなできつり上げていく大切さということもお話の最後のほうで出ました。昔はよかったとか、そういうのを話しているだけでは解決しないんだねというところでした。

新たに協働していくというところで、地域力というのが大事なポイントなのかというところです。先ほどのもう一方のグループの発表内容と似ているんですけど、地域のなかで、他者を信頼することが生きていくうえで重要ではないかと思えます。それから、人の力を受け入れることが難しい時代になっているのではないかと思います。だから、そういったものを素直に受け入れられるようなところに導いてあげられると一番いいのになというところです。一度閉じてしまったネットワークのしんどさとバランスのととり方、その辺がなかなか難しいんですけども必要なことではないだろうかと思えます。(拍手)

発表をうけて

水野 いまの二グループの発表を聞いていただいて、こういうところが気になったとか、知りたいというようなことがございましたら、おっしゃっていただけるとありがたいんですが、いかがでしょうか。あるいは、このようなことを思った、感じたというようなところでも構わないんですけども、何かお感じになったこととかがありましたら、お伺いできればと思えますが、いかがでしょうか。

男性2 やっぱ現実、現在とその背景とか、そういうことを分けたことはなかなかすばらしいと思うんですね。で、結論としては地域力にもっていったんですか？

女性1 それが割と土台になっているかしら。

水野 それをではどのような内容にしてというところまでは、今回はなかなか見えてこなくてというところはあったんですけども、ただ戻るだけだとどうもだめみたいだねというようなお話もいただきました。

細江 先ほどから出ているように、どういうふうにかから日野市の人々がより幸せにというか、いわゆるwell-beingですよ、希望を持って、日野市に住んでいてよかったなと思えるような地域、そしてその地域をつくるということになると、信頼づくりということがあるんだろうと思うんですけども、どういうふうにならるかをつくり上げていくのかというのがすごく大きなポイントになるのだろうと思っていて、だからそこがうまく築けていけると、日野市は大丈夫かなという気がしています。多分、先ほどからも出ていますように「市が」ということではなくて、それこそ多様なネットワークのなかで、いろいろ力を借りながらつくり上げていくのではないかなと思います。いわゆる開かれた、ゆるい、多様な人々の力を駆使したというか、借りた日野市づくりというのかな。日野市の人々はそういった力を持っているのだからというふうになら強く感じています。

水野 何かほかにございましたら、おっしゃっていただけたらとありがたいんですが。

田中 では一言、すみません。

水野 はい、お願いいたします。

田中 私は日野市男女平等委員をさせていただいているん

ですが、実はきょうは女性ばかり来て、男は青木課長と私だけじゃないかと思って来ましたら、男性が来ているので驚きました。私は男女平等には全く素人で、お子さんを連れて来られる方から見ると、私は落第亭主の模範みたいな例だったんです。だから、家族だとか、社会だとか、地域だとかという問題よりは、経済の問題だとか、国際化、グローバルな問題だとか、IT化だとかという背景があるから、なかなか日野市だけでは対応できない問題があるんですよということを、意識的に話しました。うつ病とか、自殺とかの話が出ましたが、それはいろんな原因が絡んでいて、特に新自由主義で、自己責任でどんどん追求したり、また、貧富の格差がものすごく拡大してアメリカみたいになっていて、一パーセントが潤って、中国もそうですけどものすごい貧富の格差が広がっていたり、というような背景を抜きにしては、やっぱり考えられないと思います。女性が経済力をつけるということが、どうしても男女平等をやっていくときには大事だと思えます。きょうのテーマについても、皆さん、特に女性の方とは違うかなと思いつつながら、私が貢献できるのはそういうところかなと思って話させていただきました。

水野 では、こちら側のグループのご発表について何かお感じになったことはございますでしょうか。

田中 その背景だとか、経済とかというバックグラウンドをきちつと見ないと、と思います。信頼づくりだとか、失敗を受け入れることとか、それは大事なんだけど、そこに背景がありますよということや、そうさせられてしまった社会のシス

テムがありますよということを感じました。

水野 ありがとうございます。こうやって二グループの発表を拝見いたしました。自分はこのように感じているとか、自分はこのように思ったというところから、それをほかの方々と共有をしていたりすることによって、今後の日野の様子というのが見えてくるような気がします。それをどうしていけばいいのかということもかなりわかりやすく見えてきているのではないかなと思います。

それぞれの持てる力で……

水野 本日はトークという形で話題提供をさせていただきました。そしてワークショップを開催させていただきましたけれども、こうやってまずお集まりいただくということが、恐らく志は同じにしつつ、でも異なるお立場からいろいろと考えを伺ってという、そういったきっかけになるのかなと思いましたが、それはもしかしたら、例えば一つの例として、男女平等とか、暮らしやすい日野につながっていくのかなと感じた次第です。私からは以上です。最後に、細江先生、よろしいでしょうか。

細江 先ほどからもお話がありますように、グローバル化のなかで新自由主義的な背景があり、私たちの生活というのは非常に厳しい状況を強いられている。特に若い人たちにとって経済格差というのが出て来たりというような問題があるわけですが、けれども、そのなかでどのような形で日野市の問題を捉え、どのような形で人々がより自分の well-being を追求しながら地域

とのかかわりを持って、持てる力——それぞれ持てる力が違うわけですから、高齢者でも他者をサポートすることは十分に可能だと思うので——それぞれの持てる力を使いながらお互いにサポートしあうのか。そうすることの意味は大変大きいのだらうと思います。そういった個々の、小さな力でもいいのですけれども、それを互いに持ち、地域のなかに築いていくような状況がづくり上げられれば、すごくすばらしい地域社会になっていくのかなという気がしております。それから、そのような状況をどういうふうにつくっていくかについては、再度少しずつ検討されていく必要があるのかなというふうに思います。すばらしい皆様にいらしていただいて、すばらしいワークショップができ、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。お暑いなか、感謝申し上げます。

水野 ありがとうございます。またこれからもよろしく
お願いいたします。(拍手)



II

公開市民講座

現代の生活デザイン

暮らしをデザインする生活心理

* 生活文化学科 平成26年度 公開市民講座 第4回
平成26年12月13日 開催

はじめに 20

挨拶 富田 洋三 本学生活文化学科 教授
司会 南雲 成二 本学生活文化学科 教授

講話① 暮らしをデザインする生活心理 22

細江 容子 本学生活文化学科 教授

講演 生活の中での「音楽の旅」 28

片岡 祐介 打楽器奏者・音楽療法家・作曲家

講話② 「音」を「楽」しむ、「聴く」「つくる」の体験とは 40

長谷川 恭子 本学生活文化学科 助教

質疑応答 48

現代の生活デザイン

暮らしをデザインする 生活心理



生活科学部の四学科が、それぞれの分野において、生活をより豊かにするための提案や実践について話し、学びあう公開市民講座。生活文化学科では、三名の専門家が講師となり、ともに暮らしやすい生活と私たちの心のありよう、心のもちようについて考えます。



はじめに

司会（南雲） 小学校現場に長くいますと、子どもたちと先生と親御さんなどでこのチャイムをしっかりと聞いて、その間に心と息を整えて、さあ、どなたがお話ししてくれるんだろうというふうには、話す人のほうに気持ちを向けていただくというようなことをはじめに意識します。ただし、それをあえて言葉では言いません。それは以心伝心する力だと思っておられます。実は話す力とか言いますが、話し手を支えるのは聞き手でございます。きょうはフロアの皆さんとともに思っております。

実践女子大学の公開市民講座をこれから始めます。この地に実践女子大が短大も含めてお世話になって四十九年。来年は五十年という節目を迎えると聞いております。四つの学科がリレーして本日に至りました。本日は生活科学部の生活文化学科が担当させていただきます。テーマはチラシにもあるとおり、「暮らしをデザインする生活心理」。生活心理という専攻ができました。そこできょうは、特に音楽、あるいは音を大切にしたり暮らしのデザインについて、専門的なことも含めて三人の先生方にお話ししていただくと思っております。総合的な流れ、タイムキーパー的な役割を果たします私、実践女子大の南雲と申します。よろしくお願いたします。それでは、私たちの学科をずっとずっと大事に育ててきてくださいました、私たちにとってみるとお父さんというか、そういうお立場である生活文化学科主任の富田洋三先生からご挨拶をいただきます。お願いします。

富田 皆様、きょうはおいでくださってありがとうございます。それにして南雲先生からお父様と言われるとは。でも、近いものがございます。



生活文化学科といいますが、生活文化って何ですかとよく聞かれるんですけども、それは暮らし方のことなんです。衣食住、いろいろな面での暮らし方、それが生活文化なんです。われわれは戦後に限っても、食べるのにも事欠く長い時間を過ごしてまいりました。それからは高度成長の中で、周りに合わせてあれも欲しい、これも欲しい、次々というるなものを買って込んで月賦に追われる、そういう生活をしてきました。

ようやく豊かになってきて、さあ、自分らしく暮らそうなんていうことが言われるようになりましたが、自分らしくと急に言われてもわからないですね。要するにわれわれの暮らしの中に、ただ働いて食べるだけじゃなくて芸術や文学や音楽やスポーツや、そういうものを暮らしの中に取り込んで楽しんでいく。そうするとまた、それをつくり出すところの仕事が生まれ、そして雇用が生まれ、所得が生まれてくる。楽しみながら豊かな暮らしをしていくことこそが、これからのわれわれの道だと思っております。

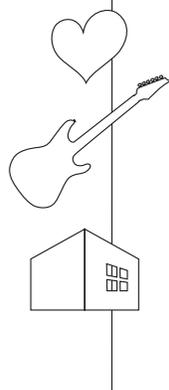
そこで、まずは「暮らしをデザインする生活心理」。細江教授は家族論をおやりになっていきます。家族を求めて遠くモンゴルの平原のパオでお暮らしになったこともございます。それから、それこそ暮らしに音楽をとということ、打楽器奏者であり、また、音楽療法家でもいらっしゃる片岡祐介先生。楽しい打楽器の演奏が聴けると思っています。それから、長谷川恭子助教。音楽の教員であると同時にピアニストでもあります。どうぞ皆様、お楽しみいただきたいと思います。

司会 ありがとうございます。それでは早速、富田先生からご紹介がありました細江先生から。細江先生のお話は非常に目からうろこかなと思います。ぜひお願いいたします。

暮らしを デザインする 生活心理

本学生活文化学科 教授

細江 容子



細江 ただいま紹介いただきました細江と申します。「暮らしをデザインする生活心理」というタイトルでお話しさせていただきます。先ほど富田学科長からお話がありましたように、私の領域は家族関係学、家族社会学、老年社会学で、生活経営領域も担当させていただいております。主に家族のことをやっております。

私のお話といたしましては、暮らしをデザインするところと、そこに重きを置きながら、それと生活心理とのかかわりを少しお話させていただいて、片岡先生にお話をつなげたいと思っております。

チラシにもありましたようにこの講座では、赤ちゃんから高齢者まで、男女とも暮らしやすい生活と私たちの心のありよう、心のもちようを考えあい、実践していく素敵な機会にできればと思います。市民の方々、学生の皆さん、きょういらつしゃつていただいているの方々に感謝申し上げます、お話を始めたいと思います。



今回は、生活の中で「音」を「楽」しむ、ということで、「聴く」「つくる」の体験を通して、生活の中での「音楽の旅」を、と考えています。いろいろな旅があるかと思いますが、音楽で旅をしてみましょうという形でスタートさせていただきたいと思っています。

私の報告内容といましては、暮らしをデザインするとは、生活心理とはどのような内容なのかということをお話しし、生活心理と音楽との関係についても触れ、それから片岡先生にお話をつなげ、さらに、長谷川先生にというような形でバトンタッチができればと思っております。

「暮らしをデザインするとは」ということなのですが、私たちの生活を考えますと、今日命をつなげ、ただ生きる、生き続けるということではなくて、パワーポイントにもありますように、生の内容であるとか質、すなわちクオリティ・オブ・ライフの問題が問われるようになってきています。

では、このクオリティ・オブ・ライフというのはどういうことかということ、よく耳にされる人が多いのではなからうかと思いますが、人間が、どれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているかということがポイントになるかと思えます。

もちろん、学術的にはQOL尺度が設けられたりということで、「幸福とは」ということで心身の健康、よりよい人間関係、やりがいのある仕事、快適な住生活や教育、レクリエーション等、さまざまな観点の尺度ではかられたりしています。ですので研

究に用いられたりということはあるわけですが、実際に私たちが日々の生活の中で考えるのは、人間らしい生活や自分らしい生活がきちんと送れて、人生に幸福を見出しているかということなのですが、皆様いかがでしょう。自分らしい生活は送れていらつしやいますか？

参加者 送りたいと思っておりますけれども、メリットもデメリットもすべてあります。

参加者 全然送れていないです。

細江 送りたいなというふうに思っている、なかなか難しい時代になっていっているのではなからうかと思えます。

ここにありますが、生活の内容、質の追求のためにはどうしたらいいのかというと、人生全体を見通しながら生活をとらえて、多様な個人、そして家族が地域社会の中で豊かに生きていけるように、私たちの生活とこのをデザインする、設計していくことができるということが大事であって、設計することのできる生活者、という視点が大切だろうと考えています。

先ほどから申し上げているように、生活というのは単なる生存とは異なっていて、命を大切に育てながら、充実した生活を営むための意識的な活動であり、自分が意識して活動的に行動していくということの意味が大事なのだらうと思えます。

では、生活者というふうに先ほどパワーポイントの青字のところまで文言を示しましたが、行政だとか企業などの社会システムによつてつくられたものに安住するのではなく、自覚した

個人が主体的に、積極的に日常生活を創造していかなければいけない。自分自身で生活を組み立てていく、つくり上げていくということの意味が、非常に大事なのではなからうかと思いません。

生活者の視点で考えると、自己生産的であることを自覚して、自分の知識や技術でさまざまなことを生活の中でつくり上げていくことが重要です。たとえばお料理を、買ってきたものではなく、自分や家族の好みに従ってつくり上げていく、ということもそうでしょう。

あくまで必要を守り、自分の経済的な状況だとか環境だとかいろいろなものを守りながら、大衆消費社会の利益主義的な戦略の対象としての消費者であるということ、ある意味みずから最小限にとどめていこうとするような形で生活の質を追求するということになるかと思いません。

このパワーポイントはフェンダーのギターです。私は別にギブソンの回し者ではありませんが、フェンダーのギターで、一九六五年モデルというすてきなギターなのですが、六十五万円もするわけで、たいへん高いですね。フェンダーのギター、六十五万円、すてきなコマーシャルフィルムが流れたりとか、あるいは『ギターマガジン』か何かにギターが出ていたりして、欲しいなと思つて六十五万円をフェンダーのギターに使うのか、それとも、六十五万円ということを考え、音楽をやるという行為を考えたときに、どういう形で自分の音楽をやるという欲求を満たすことができるのか。フェンダーの六十五万のギター

を買わなくてもいいかもしれないということをやっぱり考えてみる。

すなわち、先ほどの自分の暮らしということを考えたときに、いかにして自分の必要を考えて、行動していくかということの意味です。そこはとても大事なものではなからうかというふうに思っています。あくまでも営利の対象にならずに、必要を守りながら、ということが大事であつて、営利主義の戦略の対象とならない。そういった形で生活者としてどのように自己の生活を築いていくかということが大事なのだろうと思っております。

さらに、主体的にみずからの人生・生活を選択して、その実現のために身のまわりの生活資源を上手に利用し、生活の質を高めていく。だからこそ、地球環境のことを考えたりというような形で自分自身の生活を、常に周りを見て、広い視点で物事を見ていくということが大事になってくるのではなからうかと思えます。だからこそ、生活者一人ひとりの行動が地球環境を守つたりというような形になっていくことがあるわけです。

そういった意味では、一人の力は小さいかもしれませんが、ども、みんなです。そういったことを考えて意識的に行動していくと、少しずつ世の中が変わつてくるだろうと思えます。

今回は身のまわりにあるものを通して、生活の中で音を楽しみたいと思えます。聴きましょう、つくりましょうという形で、暮らしに彩りを添えていきたいと考えています。



洪自誠、私の好きな『菜根譚』に出ている短文です。「人は有字の書を読み解するも、無字の書を読むを解せず。有絃の琴を弾ずるを知りて、無絃の琴を弾ずるを知らず。迹を以て用い、神を以て用いずば、何を以てか琴書の趣を得ん。」ということですね。こういうことかということ、人は文字のある普通の本を読むことについては知っているのだけれども、文字のない書、すなわち目に見えない精神であるとか心というのを読むことについては知らない。また、弦を張つてある琴を弾くことについては知っているけれども、弦のない琴を弾くことについては知らない。

すなわち、文字とか弦というような、目に見える形にすべて気持ちが向いていくから、本当の意味での精神・心を用いて物事をやっていくことができない。これではどうして琴や書の本当の趣、心ということを知ることができようかということなのです。

ですので、きょうは片岡先生の実際の活動の中で、精神・心で音を楽しむということはどういうことなのかという活動をしていただけたらと思います。音楽の楽しみ方というのはいろいろあると思うのですが、本当の音楽の楽しみ方ということとを、今回の実践を通して理解していただければよいのではないかと感じております。

次のパワーポイントにいきます。生活心理とは何かということについて話したいと思います。このとらえ方はいろいろあるかと思いますが、これはあくまでも私論という形で理解

しておいていただければいいのかもしれませんが、地域の中で豊かに生きていけるように、心理学的側面から支援するということになるのではなからうかと私は考えております。ポジティブサイコロジーというか、ポジティブ心理学とのかかわりも非常にあるのではというふうには私は考えております。

どういう人たちを対象にするかということ、個人、家族を対象としているのだというふうには私は理解しております。

では、どういう方法論をとるのかということ、人生全体を見通しながら生活論を総合的にとらえて、学際的、実践的に物事を見ていくというような手法をとるのではなからうかと私自身は考えております。

よく心理学というと、いろいろ問題を抱えている人に対して、その問題を解決するというような方法をとるであろうというふうな思われています。

そこは大事な心理学の領域ですので、そこどころも大事にしなければいけないのですが、最近もう一つ、ポジティブ心理学というような形で、普通の人々が人生をより充実したものにするためにどうしたらいいのかというような研究もなされてきていて、それが今、注目を浴びているという時代にもなってきています。

どういうことかということ、学生の皆さんは幼稚園とか保育園の先生になったり教師になったりというような進路も多いので、実際に現場にいくと心の育ちの問題というのが感じられること

があるのだろうかと思えます。私は、豊かな心の育ちというのが必要な時代になってきているというふうに感じております。

生活心理と音楽との関係ということで見てみますと、どのようなと言えるのかというと、豊かに生きるということですが、個人とか家族の生の内容や質、いわゆるクオリティ・オブ・ライフの追求ということがすごく大事になってきていて、先ほど申し上げましたように、ポジティブ心理学、ポジティブサイコロジ―とかかわる問題となります。

すなわち、普通の人々が、自分の人生をより充実したものにするためにはどういったことが必要なのか、何が大事なのかということを考えていくことがとても大切になると考えています。

ですから、四月に立ち上がった生活心理専攻で一年生が本学で学んでおりますが、それは日本でも新しい領域で、学生たちは人々の生活の質を追求する心理という新しい事柄を学べる環境にいるのではないかと、いうふうに私は確信いたしております。

心理的な側面と、生活の側面でさまざまな事柄をとらえながら、広く物事を理解し、そしてなおかつ心理学的な側面から研究し、物事を考えていくという意味はとても大きいことであり、日本でも初めてといつてよいのではと思っております。

ご存じでしょうか。パワーポイントの写真ですが、これはレオナルド・バーンシュタインです。彼は、「音楽は時間の流れとともに存在する。だから、音楽は彫刻と異なり、好きなとき

に手に取って眺めたりすることはできない。すべての音楽は響くと同時に消え去ってしまう。過ぎ去った時間は取り戻せない」ということを述べています。きょうはこの一瞬、この時間の間にいろいろな方々とかかわりながら、音楽、いわゆる響くものを感じ、そして心を高め合い、喜びを得ていただきたいと思えます。音楽は消え去ってしまいますけれども、皆さんの心に刻みつけられた楽しい時間というのは消すことはできないものです。ですので、真の精神で音楽を楽しんでいたければというふうに思っております。そういった内容で片岡先生はやってくださるのだろうかというふうに思っております。

最後ですが、佐渡裕さんが、「音楽を持つ本質的な力とは、異なる価値を持つ人々がともに生きる世界を肯定すること」と述べています。個人の多様化の中でそれぞれ異なる価値を持つ時代、国境を越えてもそうでしょうし、本当に多様な人々がいるわけです。異なる価値を持つ人々がともに生きる世界というのを肯定するということが、音楽の持つ本質的な力なのだと思います。

だから、きょうは異なる価値を持つ人々が、お互いにお互いをリスペクトしながら、ともに生きる世界を肯定するということを、皆さんとともにやっていければいいのではなからうかと思っております。

再度『菜根譚』にあります文章を提示して、私のお話を終わりにしたいと思います。真の精神を用いて、音の趣を楽しみ、会得する。そのことを今回の片岡先生の時間でやっていただ



ければと思います。そして、音楽とはどういうことかという、より専門的な内容に關しましては、その専門である長谷川先生に理論的な部分を詰めていただくといいことで、この公開市民講座を進めさせていただければと思っております。

司会 ありがとうございます。本当に情熱的な細江先生でした。(拍手)

生活の中での 「音楽の旅」

打楽器奏者・音楽療法家・作曲家

片岡 祐介



司会 片岡先生は、幼稚園、保育園、小学校、いわゆる保育、療育、教育の世界で、たいへん活躍されている本当に豊かな先生です。前置きはもういりませんね。では、片岡先生にお願いをいたします。よろしくお願いします。(拍手)

片岡 では、真の精神を用いて、琴の趣をこれから会得いたします。そんな大層なことでもないんですけど。

皆さん、初めまして。僕はいつも何も考えずに、丸腰で出てくるんですね。よく学校で子どもと一緒に音楽つくったりとか歌をつくったりとか、一緒に楽器を鳴らしたり、そういうことを日々やっているんですけど、いつも丸腰で。丸腰なんですけど、何も決めていないと不安なので物ばかりいっぱい用意して、用意したのに使わなかったりとか、そういうこともあるんですけど。

先ほどの細江先生のお話が、言葉で言うところのことなんだと思って聞いていましたけど、生活文化学科というんですね。その「生活」という言葉で僕、連想すると思うのが、以前、





歴史の本、近代史みたいな本を読んでいたんです。戦後ぐらいの時代だと思うんですけども、ある議員さんが議会の最中に差別用語みたいなことを言ったのかな、汚い言葉で、敵対する党の議員に。すごく問題になって、その人は謝罪したんですね。その謝罪がすくよくよと、「頭ではわかっておりましたが生活になっておりませんでした」と言うんですよ。これは僕、謝罪の言葉としては名言だなと思ってね。本当に反省したんだなという感じがしたんですよ。結局、辞職しちゃったらしいんですけど、僕だったら、わかった、許すという感じがするんです。「生活になっておりませんでした」という言葉でね。

僕は一年ぐらい前から急に料理をすることに目覚めて。「インドカレーつくるぞ」とかね。そういう人は難しいことをやりたがるんですよ。今もやるんですけど、まだ生活になっていない感じがして。つまり、冷蔵庫の中身でつくれないんですよ、残り物では。レシビ持って、「カルダモンというのがあるんだな、せつかくだし、鶏肉ちよつと高いやつ使おうかな」なんて。楽しいんだけど、まだ生活にはなっていないですね。

音楽は生活になっていないと思います。ふだんから落ち着きなくて、こうやっているんです。料理もちよつと煮込んでいる間、はしでチンチキチンチキ。そうすると多分、生活になるんですね。

音楽も生活になっていない人って結構いるんですね。音楽大に行くと、割とね。猛練習しましたけど、猛練習して弾ける

ようになりましたけど、生活になっておりませんでした、みたいなね。そういう生活的な音楽をやりたいなと思ってるんですけど。

できるだけやり取りをしながら皆さんとやりたいなと思ってる、逆にやり取りがないと先へ進まないという……。

何しましうね。何しましうと言われても、僕が何者かまたね。ちよつとだけ自己紹介します。

僕が子どものころ兄貴がピアノを習っていて、何かノリで「僕もピアノやりたい」と言って、小学一年生のときにピアノを習いに行っただけです。でもレッスン一回で何か知らないけど怒って帰ってきて、「もう二度とピアノはやらん」と言っただけで。親も、「そんなに嫌ならやめようか」と言ってくれて。嫌いになっではかわいそうだなと思ったんですよ。

何でそんなに嫌がったか僕は記憶にないですけど、多分、僕の性格からすると、この指はこうでこうで、もういいみたいになって、すぐにやめて。人にあれこれ言われるのが嫌いなので。あれこれ言われるのが嫌いな人が習いに行っただけじゃないですよという感じなんですけど。

音楽あまり好きじゃなかったですね。小学校で昼休みが終わるときに音楽が流れるんですね。音楽が流れたら校舎に戻るみたい。あるとき、その音楽に、みんなが戻る足取りがリズムに合っていることに気づいて、「気持ち悪い」とか思って、「絶対僕は音楽に合わせない」みたいにやっていたりとか、友達の家に遊びに行ったら友達の兄貴が学生服を着て、中学生だと思っ

んでですけど、ヘッドホンしてこうやっていて。(リズムに合わせ体を動かす) 気持ち悪いものを見たってね。

どちらかというと、音楽というのは結構人の心を惑わす、知らず知らずにコントロールする悪いものみたいなイメージがあったんですけど、それが五年生ぐらいのときにふと見ていたテレビに『音楽の広場』という番組があって、芥川也寸志と黒柳徹子が司会していて、そのときのゲストがマリンバ奏者だったんですね。木琴のでかいやつ。それで、聞いたこともない奇妙な音楽をやっていたんです、その人は。どんなのかというと、そのやっていた曲が弾けるわけではないんですけど、イメージとしては、こういうのをやっていたんですね。(弾いてみせる) はっと思つて。僕はでたらめ弾いていると思つたんです。でも、それは後でわかつたんですけど、現代音楽と言われる新しい作曲家が書いた作品で、ただ、楽譜はなかつたし、覚えていたんだと思うんですけど、子どもの僕の目からするとでたらめ弾いていると思つて、でも、すごく格好いいと思つたんですね。「でたらめ弾いてもテレビに出られるんだ」とかつて。

僕、「ちよつとやろうかな」と思つて、ちよつとだけあったお年玉の貯金を持つて行つて、卓上木琴を買つてきて。当時、三四〇〇円。半音階もちゃんといつていたんです。黒い、よく幼稚園なんかにあるあれで、「芸術は爆発だ」みたいな。ラジカセで録音して、やつて、また録音して、「一回目より二回目のほうがいいな」……、どういいのか悪いのかわからないけど、何か自分なりの判断。「ちよつと散漫だな」とか、「今の集中で

きた」とか、そうやっていた。

でも、そうやって好き勝手遊んでいると、楽譜を覚えたりするというのは結構あつという間なんですね。英会話とかでもそうでしょう。必要があつて外国人と一生懸命ノーとかイエスとかやっているとそのうちしゃべれるようになって、しゃべれるようになってから字を覚えるというのが意外と楽なんですよ。皆さんが日本語覚えるときも、多分そうだったと思うんですけど。なので、音楽は多分楽譜の読み書きから入るよりも、とにかくたたくとか、でたらめ弾いてみたりとか、それを楽譜で書くところになりますみたいに覚えたほうが、僕は多分いいと思うんですけどね。

そんなのがあつて何とか楽譜を覚えて、音楽大学に行き何とかかんとかやり、それで何とかプロになれて、在学中及び学校出てからしばらくスタジオミュージシャンというのをやっています。映画音楽とかコマージュの音楽とか、そういうのを録音マイクの前でやつてお疲れ様、みたいなのをやるんですけど、そのときは自分の好きなことを仕事にできたし、何かミュージシャンって格好いいし、結構いい感じと思つていたんですけど、だんだん消耗するんですね。

つまらないね。話ちよつとすつ飛ばします。

こうやって反応してもらえると、そうなんですよ。

話してばかりではなくて、ちよつと演奏します。演奏しながらしゃべろうかな。

そうやってスタジオミュージシャンをやっていた。それこそ



AKBの、AKBは当時なかったけど、そういう音楽をやっていたわけですけども、ああいうスタジオの録音というのは重ねてとるんです。最初にドラムが入っていて、それを聴きながら僕はパーカッション入れて、最後にカラオケができれば歌を入れるんですね。そうすると完成形を聴く前に、お疲れ様って帰されちゃうんですよ。

そういうことをいっぱいやっていて、まさに社会の歯車みたいな感じで。あるとき居酒屋で何となく飲んでいたら有線です。

ポップみたいなのが流れて、「あれ、これマラカスとトライアングル僕だよな、こういう曲だったのか」となって、そのとき酔っぱらっていたこともあって結構悲しくなっちゃって、「こんなはずじゃなかったよな」って、非常につらかったですね。「あ、やめよう」みたいに思って、音楽やめるんじゃないですけど、そういう仕事は全部やめたんです。

そういうきっかけで、自分でも何がよくなってどうしたらいいかわからなかったんですけど、勘で、音楽療法とかそういう世界に行くと人と面と向かって生々しい音ができるかなと思っただので、そういう仕事を始めたんです。それで今に至ると言うようなことですね。

なので、一方的に録音して一方的にバーツと流れてみたいな音楽をつくるのではなくて、そういうことと一緒に音楽をやるうと。

鍵盤ハーモニカって触ったことある？ これを演奏しましょう。

(演奏)

いろいろなネタがありますよ。これをちょっと浅くつけて押し込んでみます。演奏しながら、すごいノッてきたなと。(勢いでホースが外れる)

あと、これも結構おもしろいですよ。ヤマハの鍵盤ハーモニカでしかできないですけど、ホースがほかのと違って、それで『ぞうさん』ができます。何で上がってくるかわからないんですけどね。これ、解明したいよね。確かに。いまだに僕もよくわからないんですよ。これ、横向いているからジェット

噴射で。でも、つながっているからこうきちやうということかな。意外と簡単なことでした。

ピアノカは商品名なんですよね。ヤマハがピアノカ、鈴木楽器がメロディオン、全音がピアノー、ドイツにメロディカといるのがありますね。そんなこと覚えてもしょうがないですよ。映像でも見るかな。

僕がどういうことをふだんやっているかということですね。

一つめ。静岡県の浜松にクリエイティブサポート・レッツというちよつと不思議なNPOみたいなものがある、障がいのある子どもと一緒に美術―アートをやったり音楽をやったりしている、そういう機関なんです。

そこで最初、僕は、子どもたちといろいろワークショップやするために応募してきた人と音楽やっていたんですけど、もうちよつとみっちりかわりたくなつて、「バンドやらない？」とか思つて。「俺たちバンドやらない？」って、もてたくて文化祭目指して始めるみたいな感じでやりたいなと思つて、それで集まつたんですね。みんな初心者で、その辺がまた文化祭っぽい感じで。

僕は中古楽器屋さん行つておんぼろのエレキギター買つてきて、エレキギター弾けないんですけど、「弾けないけど弾く」というほうがちよつとパンクっぽくていいかなと思つて。

何か解説することあるかな。

この男の子ボーカルなんですけど。口の中マイク入れてやるんですね。「どうもサンキュー」みたいな感じでまたいなくなつ

て、どこ行つたかわからない。また出てきて。ミック・ジャガーとか矢沢永吉とかもそうですけど、そういう感じですね。

これ、始めたばかりのころで、まだ誰がどの楽器担当になるかが決まっていなところ。だから、たまに交代したりしているんですけど、全部即興です。全部即興でやる即興ロックバンドですね。

後でカメラ見ていたら入っていた映像で、動画の最初のほうに誰か子どもが撮っていたんだと思います。それがとてもロックっぽくていいです。

では、いきますね。

(動画)

こんな感じですね。いろいろなことをやっているんですけど。後でもう一個ぐらい何か見ましよう。

こんな私と皆さんで何ができるかな。

場所の特性といるのがあるんですよ。人も毎回違いますし。今、楽器持つてる？(会場の男の子が口琴を持っている) 持っているんだ。口琴。ちよつと聞かせて。みんなに聞かせてください。これ、珍しくておもしろいものだから。まさか本当に持っているとは思わなかつた。これ、口琴、鳴らせますか。昔のアニメとかでカエルの音とかビヨーン、ビヨーンって、そういうのに使うものですね。

皆さんは楽器お持ちじゃないですか。いろいろお持ちですよ。膝とか紙とか。何か皆さん、お手持ちの楽器を用意ただけですか。体でも、ほつぺたとかでもいいです。楽器だらけですね。



私、恥ずかしいわという感じの顔の方とか、マスクしていて全然表情わからない方とかいろいろいらっしゃいますけど、スイッチというゲームやってみましょう。

スイッチというゲーム、やったことない？ 知らないでしょう。これ僕、イギリス人に教わった。日本ではまだはやっていないんです、本当の話。

僕がスイッチと言ったら、僕のまねしてください。スイッチと言う前にまねしちゃだめですよ。皆さんも。

(ゲーム)

ということですね。これやると、幼稚園とかでやると、最終的にめちゃくちゃしーんとなります。静かにさせたいときにひとしきりやるという。

(男の子に向かって) おもしろかった？ いまいち？ そうかもね。そうなんです。でも、楽しそうにやっていたけどね。用意してきたことをやると、あまりよくないんですよ。だから、その場で考えたほうがいいですよ、本当は。

男の子 モンチッチじゃんけん。

片岡 それどんなの。教えて、教えて。勝ったらどうするの。男の子 最初のじゃんけんて勝ったら「あんたちよつとばかね」と言うの。

片岡 勝った方が負けたほうに「あんたばかね」と言うの。

男の子の母 負けたほうは何と言うの。

男の子 「あんたよりましよ」。

片岡 それは一緒に言うの？ ちよつと勝負だな。

(ゲーム)

片岡 覚えられない。わかりました。ありがとうございます。皆さんの中でも知っている方いらっしゃるようでしたね。

(ゲーム)

ついこのあいだも大分県の別府というところの児童館で、新しい遊び開発クラブというのがあって、その講師で行ったんですけど、講師というよりは教えてもらってばかりで、この「せつせつせ」みたいなやつをちよつと変形させたり、ツノオニといって、角をつけてどんどん鬼をふやしていく、ゾンビみたいな遊びですけど。いろいろやっていたんですけど、子どもたちが覚えるのが早くて、やっぱりこういうふうにしよとか、どんどん更新していくんですね。どうだっけとか、ついていけないんですよ。でも、子どもたちはさつと順応して、いつも参っちゃうんですけどね。

もう一個映像見ようかな。

小学校でやっているやつと、老人ホームでやっているやつ、どっちが見たいですか。

参加者 老人ホーム。

片岡 では、そっち見ましょう。

岐阜県の飛騨の山奥にある老人ホームで、僕が一年間通って。月一回か二回。僕は自分の頭の中ではアニマルセラピーと呼んでいたんですけど、僕がアニマルでして、アニマルをお年寄りの中に投入していく。僕は好き勝手やると。好き勝手に音楽をやって、そこで看護大学の先生とか施設職員の方だとか作業療

法士だとかがそれを見て、後から打ち合わせというか、きょうはこうだったなと記録とったりしてね。

ともかく僕はセラピーの意図は持たずにアニマルとして振る舞うと。毎回いろんな誘いかけをやるんですけど、この回るときはとりあえず冒頭、僕ともう一人で演奏して、お年寄りはずっと聞いてもらおう。だんだんみんなに集まってきたら。それから「いいかげん俺たちもやりたい」みたいな気持ちになってくれるかどうかなっていうところで、途中で楽器を配るということをした会です。

(動画)

飛騨ですね。雪が残っています。これは通い始めて最後のほうですね。四月ぐらいから行って、二月とかだった気がします。この人、一〇〇歳です。

以上です。こういう感じですよ。

何か質問とかないですか。質問ありそうな感じがしますね。ないですか。これについて、今の映像についてだけでなくもいいですよ。

参加者 なぜ老人ホームでやったんですか。

片岡 いい質問ですね。鋭いですね。

いくつかわけがあります。僕は曲をつくったり歌をつくったりする。あとは演奏もするんですけどね。今こうやって鍵盤ハーモニカ吹いていたでしょう。聴いたことがない音楽を聴いてみたいんですよ。お年寄りと一緒に演奏したり、いろいろな人と音楽をやるのが好きなのです。

逆に言えば、プロとだけ、プロ同士だけでやっている音楽だとちよつとつまらないなと最近感じますね。ある形があつて、そこはCマイナーで、ここはこう入れてこれで終わりねとかいつて、そういうふうにつくると、そこそこ個性があるけど何となく似たようなものができ上がつて。そうでない世界がおもしろいと。

やつぱり老人ホームなんかだと、リズム合わない方とかいらつしゃるんですね。そういう、えも言われぬ調和が生まれるんですね。先ほどのバンドとかもそうですけど、よく考えてみれば当たり前のことなんですが、それぞれみんな違う音を出す。座っている位置も違いますけどね。誰一人同じ音楽を聞いていないんですよ。多分、そういうセッションとかではなくても、例えば何かオーケストラ曲をここでかけても、多分皆さん、全然違うところを聴いているんですね。そのように人間というのは多様なんですね。

その多様なまま、それを一緒にできる音楽というのが僕はすごく好きで、それをめざして、だから、「楽譜が読める人でなければ参加できません」とか、「経験十年以上でないためです」といった世界ではなくて、もう何十年もやっているプロ中のプロみたいな人と、「初めて触ります、これで合っていますか」みたいな人と一緒にやったときに生まれるサウンドが本当に楽しくて。昔の能をつくった世阿弥という人がいますね。あの人は「上手は下手の手本、下手は上手の手本」と言っているんですよ。



僕は長年やっているんで、多分、そういう意味ではある程度演奏ができる専門家で、上手というのに入るのかもしれないけれども、初めて触っている人の様子というのはいさぎよく勉強になるんですね。特にお年寄りのトン、トンというのは、こういうたたき方、映像見てまねしてみたりするんですね。あと、自閉症の子のね。大学で習った打楽器の人がいたんですけど、大学で習ったタッチって大体こんなんです。ピアノもこういう感じ。手に障がいがある方は、すごい力入っているのに入る音はすごい小さい音だったりするんだけど、ものすごい密度なんですよ。

参加者 何回老人ホームでやっただけですか。

片岡 大体十五回ぐらいだと思う。多いと思った？ 月一回か二回ぐらい行っていたから。だから、芸を盗みに行っているみたいなのがあつて、結構……。

参加者 例えば片岡さんたちが最初に演奏していて、皆さんが来られて、また皆さんがお部屋に戻っていくまで、大体どのぐらいの時間ですか。

片岡 大体一時間ぐらいですね。一時間でも、最初は職員さんから「長いんじゃないか」「疲れるんじゃないか」と言われたりもしたんですけども、相当ほんやりやっていますのでね。やっていない人もいるので、「休みながらやってください」みたいな感じで。

割とそういう場が好きで、お花見みたいなのもそうだし宴会とかでもそうだし、この映像でもそうでしたけど、結構最後

はノリノリで、最後のほうになって歌い出している方がいると思つたら、「俺帰るわ」みたいな人がいて、宴会とかでもそういう感じですよ。もう「軒行こうぜ」とやっている人もいれば、「あした早いから」みたいな。盆踊りとかそういうのを一斉に集まって一斉にやって帰るのではなくて、ぼつぼつ集まってぼつぼつ帰る。

世界中の民族音楽、僕はいろいろのを聞くんですけど、聞いていると、何となく始まって何となく終わる音楽ってものすごく多いです。セーので始まってパツと終わるのって意外と少ないですよ。

あと質問ないですか。

参加者 十五回行った後は行かなかったの？

片岡 十五回のは行かなかつた。お別れが来るのがつらいんですよ。いろいろね。永遠にやるわけにいかないから。

ちなみに言うと、十五回行って、看護の専門家とか福祉の専門家とかがついていろいろ記録とかとっていて、痴呆の進みぐあいのはかり方とか何かあるんですね。それを記録にとつてみたいですよ。僕はそういうことはあまり興味ないんですけど、せっかくだからいろいろな研究絡めていたんですけど、でも、それを見た結果は特によくなつてはいないみたいですね。普通、進行しますからね。特にそういうことに関しては変化がなかったです。

ただし、おもしろかったのが、その施設の職員さんが言っていたことです。施設には、音楽をやっていたグループと、やっ

ていないグループがあつて、音楽をやっていたグループが各段に、慰問の演奏とか演劇とかが来ると反応がいいというんですね。目で追うというんですね。印象としてそうだと言っていました。それはすぐおもしろいなと思うんですね。多分、僕が来ては変なことをやるので、「何するんだろう、洗濯物揺すっているな」とかね。そういうところにずっといたのが変わったのではないかと思つて。何となく一人でポーツとしていたのではないかと、周りを見るようになった、みたいなことがあつたと聞きました。ずっと眠っていたおじいさんも、あの方はわざわざ来て寝るんです。いつもそうなんです。でも、来てくれるだけいいなと思つていたら、あるときみんなノリノリの最中に「ええ音や」とかね。やっぱり聴いていた。

特に、多少ごちゃごちゃした感じのこういう音楽つて、一回やるのをやめて聴くと、すごい風景が見えてきておもしろかったりします。やりながら聴くのは結構難しいですからね。よく僕もこういう映像だけではなくて、録音だけとつてそれをうちへ帰つて聴いたりするんですけど、音楽にならないということはありませんかと思つてますね。大概集まつて音を出せば音楽になつてしまいますね。

楽器もあるし、何しましょう。
歌もつくつたりするんですよ、僕。

時間あるから、つくれるでしょうね。小学校の授業四十五分で、歌をつくり、歌の伴奏も覚えて、振りつけまでつくつたことありますからね。詰め込み教育です。

何となく歌でもつくつてみましようか。

どうやったらつくれるかな。一行ぐらゐの、コマーシャルソングぐらゐの短い。何か言葉を出していつてもらうのがいいかな。

男の子 歌、替えたりするのは。

片岡 替え歌もいいんだけど、歌そのものの全部つくつちゃう。

男の子 全部替えたらいいんじゃない？

片岡 そういうこと。メロデーも歌詞も替えれば新しい歌ですよ。僕が着替えて、別の中身が替えるみたい。そうすると、片岡祐介じゃない。

何か一つ言葉言つて。

男の子 え。

片岡 「え」いただきました。「え」の次何？

男の子 た。

片岡 なぜ「た」なんだろう。次は。

男の子 えつたこ。

片岡 「えつたこ」だとよくわからないけど、「えつたこ」だったら何かいそうですね、玄界灘あたりに。冬の「えつたこ」おいしいなみたい。

「えつたこ」がどうなりますかね。何かほかにもいいのありますか。

男の子 えつたこたんこぶ、ぱ。

片岡 「えつたこたんこぶぱ」、なかなか語呂がいいですね。これぐらゐにしておくか。あまり長い書いてもしょうがない



いから。

では、歌詞ができました。

「えつたこたんこぶば」ってどんなメロディー？ どういうふうに歌う？ これにどういうメロディーつけますか。ドレミファソラシドの中でどれが好き？

男の子 シ。

片岡 「えつたこ」の「え」は「シ」に決まりました。「つ」は何にしましょうか。

男の子 ド。ファ。

片岡 ここまでできました。次、どうしましょうかね。

男の子 ソ。ミ。

片岡 どうしましょう。

男の子 シ。

片岡 最後の音、決めて。ちゃんと。

男の子 ド。ミシドの「ミ」を「ド」に変えたら？

片岡 ソミドシド。いいかもしれませんね。どうしましょうか。何か伴奏つけたらいいですね。変えてもいいです。多分、僕より得意なんですよ。僕、人の助けを借りるしかないですよね。

では、これを楽器でやるか。適当に配ってもらえますか。

男の子 やったことないものやりたい。

片岡 やったことなさそうなものは意外と少なくて。太鼓とかいいですね。太鼓いきましようか。何となくきょうは、割と学校とか幼稚園、どこでもありそうなものという感じで考えてはいたんですが、やったことないものは少ないかもしれない

ません。

楽器配っている間、皆さんのお手元にストローとはさみあります。ストロー笛のつくり方をお土産で伝授しようと思えます。

はさみが手元につく前に、ちょっとだけ楽器の紹介。皆さん、鳴らせば何でも鳴るので特に解説はいらないと思うんですが、クラブスという楽器、これだけやり方をお伝えします。これ、手で握っちゃうといい音しなんでしょうね。なので、木琴だと思っでちょっと手で浮かせてやって、それで当てる。あとは特になんかと思いませんけど。

それではストロー笛のつくり方を伝授します。つぶします。どっち側でもいいですよ。よくつぶします。できればぺったんこになるぐらい。そして、こういうふうにします。つぶしたところをこう切ります。(端をV字に切る) こういう形になるとちよつんです。とがっついていてもいいんですけど、とがっついてるとちよつと危ないと思って、少し台形。一・五センチぐらいかな。

鳴りましたか。こうやって指であててやって、もう一本の手で包むとこうなります。

では皆さん、時間も迫ってまいりましたので、みんなが最後に『えつたこたんこぶば』を演奏したいと思います。ストロー笛もあるから、僕が「一」とやったら細長いストロー笛を皆さんで吹くということで、「楽器やるよ」というときの合図どうする？

男の子 チョキ。

片岡 チョキが楽器ね。それぐらいですね。覚えることは。

男の子 チョキがグーになったらとまる。

片岡 グーやつたらとまる。そのルールもつきました。そのルールにのっとって、好き放題勝手にやってください。せっかくこれができたので、僕が「ワン、ツー、スリー、フォー」と言ったら、みんな「えつたこたんこぶば」と言ってくださいね。僕はチラシに「楽譜は使いません」と書いたけど、使っちゃいます。これだけ。そして、ここからまた楽器。音楽用語ではブレイクといます。ちよつととまるところがあるんですね。

では、本番いきます。練習してないけど、本番いきます。

(演奏)



よかったですね。

時間ですね。特にまとめの言葉はあえて言いません。音楽というのはコミュニケーションでもありますよね。コミュニケーションというのには、意外と知られていないことなんですけど、受け手がつくるんです。つまり、私がこう言ったといつて、それを聞いて「あ、そうか」となった瞬間、コミュニケーションが発生します。例えば、カラスがカーと鳴いているときに、「ああ、かわいいな」と思ったらコミュニケーションが発生しています。あるいは、ちよつとむしゃくしゃしているときに、「カラスまで俺のことをばかにしやがつて」となると、コミュニケーションが発生しています。それに何も気づかなければコミュニケーションは発生しない。

そして、人によって受けとり方はまちまちです。だから、僕の講座もまとめはしません。皆さん、何かいろいろなることを感じてくださったのならうれしいですけども、それぞれいろいろなることを自分で持ち帰っていただければいいかなと思います。では、これで終わります。(拍手)

司会 ありがとうございます。躍動的な時間というか、楽しい時間は本当にあつという間ですね。

予定よりも少し時間はいただいているんですが、もともと片岡先生にはそれも含んでみんなと一緒に時間をつくっていただきたいというふうをお願いしておりましたので、ありがとうございます。

では、お手元の楽器を回収します。



片岡先生、実はこういう本も書いていらっしやいまして、これは細江先生がわざわざこういう本があるよと買い求めてきてくださって、片岡先生の許可をとってみんなにアピールしちゃえということになりました。

『即興演奏ってどうやるの』という、片岡先生とお友達の野村先生とでつくられた本です。CDもついています。「音楽療法セッションレシピ集」ということで、すてきなご本です。出版社はあおぞら音楽社というところから出ています。研究室にも入れておきますので、ぜひ興味のある方は手に取って読んでいただきたいと思います。

片岡 本の中のイラストを僕が書いています。表紙は違うんですけどね。すごく下手なんですけど、書いています。

細江 水野先生に、どなたかすてきな方いらっしやらないかしらと伺ったら、この本を紹介いただきました。私はすぐ出版社に電話をいたしました。片岡先生のメールアドレスを伺いました。ラブコールをしました。そうしたら、運よく。皆様感謝ですね。ちょうどこの日があいいますとメールが来ました。

それで本当に私は幸せだったと思うんですけども、今回このすばらしい時間を得ることができたということで、本当に片岡先生に感謝。そして、神様なのか歌子先生なのかわかりませんが、感謝ということですね。ありがとうございます。

片岡 本、よろしくお願ひします。年末なので死活問題なので。生活文化問題なので。

司会 みんなでコラボして片岡先生を救いましょう。それは冗談ですけれども。

ぜひまたよろしくお願ひいたします。(拍手)

「音」を「楽」しむ、 「聴く」「つくる」 の体験とは

本学生活文化学科 助教

長谷川 恭子



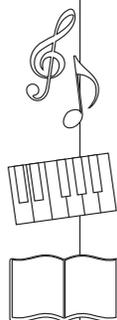
司会 それでは次に、本学の長谷川先生から「『音』を『楽』しむ、『聴く』『つくる』の体験とは」ということで、まとめるといふよりも、より発展するための視点のお話をいただいきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

長谷川 長谷川と申します。一番最初に細江先生のお話をいただいて、つぎに片岡先生の楽しいワークシヨップをしていただきました。私は音楽教育が専門ですので、これまでのお話を音楽の見地から理論的にまとめるとどういふふうになるかというところでお話しさせていただきたいと思えます。

皆さんは音楽を、生活の中でいろいろな形で楽しんでいらっしやるでしょう。好きな音楽が皆さんおありだと思えます。どんな音楽がお好きなのか、皆さんに伺ってみようかなと思えます。まずは、学生の皆さんに聞いてみましょうか。どんな音楽をふだん聴いていますか。

学生 Hey! Say! JUMPとか……。

長谷川 お若い方には、やはりジャニーズが人気ですね。私





も昔は聴いていましたね。では、大人の方に伺ってみたいかなと思います。どんな音楽をふだん聴いていますか。

参加者 ジャズとか……。

長谷川 おしゃれなところが出てきました。ジャズは「大人の世界」で、とても奥深い音楽ですね。そういった音楽の嗜好が、皆さんおありだと思います。そういった嗜好についても、理論的に少し触れられるところがあればと思います。それでは、お話しさせていただきます。

本日、私は「『音』を『楽』しむ、「聴く』『つくる』の体験とは」というお題をいただきましたので、このお題に沿ってお話しさせていただきますと思います。まず、一番根源の問題となる「音楽」というのはそもそも何なのかということを学問的にとらえていきたいと思っています。

「音楽」という言葉について、辞典による定義づけを確認してみます。『大辞林』では、「①音による芸術。時間の進行の中で、一定の法則に基づいた音を組み合わせ、人の聴覚に訴える美を表現する。②歌舞伎で、人物の登場や退場に用いる囃子(はやし)。」と定義しています。②は、日本の音楽の見地になります。一般的には、西洋音楽であったりとか、皆さんがふだん聞いている音楽というのは、①のほうになると思います。

『音楽大事典』という、音楽専門の事典があるのですが、ここでは音楽の起源や定義について説明されています。「西洋における一連の同属語」と書いてあります。「音楽」という言葉の語源を見ますと、中国なんですね。漢時代にまとめられた『礼

記』というものがありまして、その中の『楽記』に書いてあるのが、「物に感じて動くものが『声』であり、『声』が変化して形式を持ったものが『音』であり、さらに『音』をかさねて楽しみ、舞具に及ぶものが『楽』である」と書かれています。

日本で、「音楽」という言葉に洋楽を含めるようになったのは、明治十年代以降のことですね。それまでは「楽」という文字だけですとか、「あそび」もののね「音曲」「うたまひ」「歌舞」などの言葉も使っていました。指し示す内容は、現在でいうような邦楽ですね。日本の伝統音楽というところです。

明治六年発行の本では、兵隊のラップの絵の説明に「音楽」と書いてあります。明治十二年には、国の機関に「音楽」という言葉をつけた音楽取調係というものが創設されます。これは洋楽について研究される機関でした。その後、洋楽関係者を中心として「音楽」という言葉を洋楽に限定する傾向が強くなってきて、今日に至っています。

このように言葉や定義が変化してきた「音楽」ですが、私は教育が専門ですので、学校教育の中で音楽をどのように扱おうとしているのかを見たいと思います。小学校学習指導要領の音楽編では、指導内容を「表現」と「鑑賞」の二領域に分けています。「表現」には、「歌唱」ですとか「器楽」「音楽づくり」というような、まさに表現をする内容が挙げられています。聴く活動になる「鑑賞」の内容には、「ア 楽曲を全体にわたり感じ取ること」「イ 楽曲の構造を理解して聴くこと」「ウ 楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること」の三項目が挙げられています。

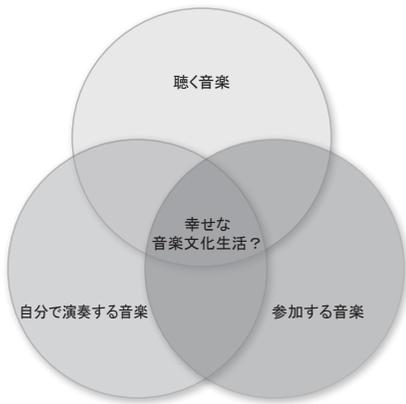


図1

興的な活動をして見たところは、
本日のワークショップで、即

わけてですね。

来するような部分もあるという
部分もありますが、相互に行き

「参加する音楽」が重なっている
く音楽」「自分で演奏する音楽」

このようにカテゴライズさ
れている音楽を図にしてみると、

音楽」があるということになります。

このようにカテゴライズさ
れている音楽を図にしてみると、
「参加する音楽」と「自分で演奏する
音楽」が重なっている部分がある
「参加する音楽」が重なっている
部分もあるが、相互に行き来する
ような部分もあるというわけです
ね。本日のワークショップで、即
興的な活動をして見たところは、

このように、音楽活動は、能動的な活動である「表現」と受
動的な活動である「鑑賞」というようなカテゴリーに分けるの
が一般的です。けれども、これだけ多様な音楽活動が行われて
いる現代ですから、音楽活動のカテゴリーは、現代でもこの二
領域だけだろうかと思うこともあります。

ロラン・バルトという人がいるのですが、音楽活動について「二
つの音楽がある（少なくとも私はいつもそう考えてきた）。聴
く音楽と自分で演奏する音楽とである」と述べています。指導

要領と同じ二領域ですね。これに対して西島千尋氏は「『聴く
音楽』『演奏する音楽』の他に『参加する音楽』がある」「『参加す
る音楽』は、常に人々の身近にあった」と述べています。これら

のことを整理してみますと、音楽活動には皆さんがよく行っ
ている「聴く音楽」のほかに、「参加する音楽」と「自分で演奏する

音楽」があるということになります。

「参加する音楽」ですとか「自分で演奏する音楽」という部分を
やったことになりました。つまり、本日のお題の「つくる」の部
分であったわけです。それぞれ独立した音楽の活動ではありま
すが、生活の中でこれらの音楽活動を経験することができるよう
になると、この三つが重なった一番真ん中の部分になり、皆
さんの余暇において幸せな音楽文化生活というものを送ること
ができるようになるのではないかと考えております。

それでは、本日のお題の一つ、「聴く音楽」について考えて
いきたいと思えます。「きく」という言葉にはいくつかの漢字
の表現がありますね。どのような違いがあるのかについて、辞
書の定義をまず見てみます。そうしますと、「① 音声を耳で感
じとる。耳に感じて、知る。」② 心を落ち着けて注意して耳に入
れる。傾聴する。」③ 人の言うことを理解して、受け入れる。
また、従う。ききいれる。」④ たずねて、答えを求める。問う。」⑤
においをかぐ。鑑賞したり調べたりする。」、ほかにもあります
が、こんなことも「きく」に入っているんですね。音楽では「②
心を落ち着けて注意して耳に入れる」というところの漢字「聴」を
用いるのが一般的です。ふだん書くような「聞く」という漢字
を使うときは、単に音を聞き取るだけで、そこに思考や感情が
伴わないときに用いることが多いと思います。

音楽活動における【聴く】とは、大体は鑑賞のことを指して
います。鑑賞という言葉は辞書で調べると、「芸術作品などを
見たり聞いたり読んだりして、それが表現しようとするところ
をつかみとり、そのよさを味わうこと」「芸術作品のよさを味



「鑑賞」とは…

- ・ 芸術作品などを見たり聞いたり読んだりして、それが表現しようとするところをつかみとり、そのよさを味わうこと。「名曲を一する」「一力」『大辞泉』
- ・ 芸術作品のよさを味わい楽しみ理解すること。「絵画を一する」「音楽一」〔同音語の「観照」は冷静な心で対象に向かいその本質をとらえようとする。〕「観賞」は植物・魚など美しいものを見て心を楽しませることであるが、それに対して「鑑賞」は芸術作品の良さを味わうことをいう』『大辞林』

観照 ① 主観を交えず、対象のあるがままの姿を眺めること。冷静な心で対象に向かい、その本質をとらえること。「人生を一する」→観想

② 美学で、美を直観的に受容すること。自然観照と芸術観照とがある。→静観・鑑賞
観賞 美しいものを見て味わい心を楽しませること。「草花を一する」→鑑賞

英語： appreciation 評価。認識。鑑賞。鑑賞力。感謝。

Recognition of true worth 値打ちをしっかりと理解する

Admiration with great respect いいものを本当にいいと思う、尊敬の念をもって褒めたたえる

独語： ästhetischer Genuß 「美（学）的な、美しい」「楽しみ、喜び」

「聴く」とは、表現を感受し、楽しみ、理解し、味わったうえで、自己の中で評価すること

図2

わい楽しみ理解すること」と書いてあります。

「鑑賞」は外国語ではどのようなようになっていくかという「appreciation」など、いろいろあります。ドイツ語だとästhetischer Genußと書いてあります。どんな意味があるかというところ、英語ですと、評価、認識、感謝、値打ちをしっかりと理解する、いいものを本当にいいと思う、尊敬の念をもって褒め

たたえる、などがあります。ドイツ語だと、美（学）的な、美しい、楽しみ、喜び、などの意味があるわけですね。つまり、「鑑賞」（聴く）とは、表現を感受して楽しみ、理解し、味わったうえで自己の中で評価すること、というような定義がされているわけです。（図2）

次に、「つくる」について見ていきたいと思っています。音楽における【つくる】活動というのは、一般的には作曲であったり創作という言葉で表されるものだと考えています。先ほど、片岡先生のワークシヨップでやったような演奏も、楽器で再現する際の表現の仕方については、演奏者がつくる、といっても過言ではないと思います。

これら三つの性質は異なっていますが、どのカテゴリーにおいても、最初の行動の出発点で即興性が存在するというふうに思います。今回は、先ほどのワークシヨップでも行った「即興」について確認してみたいと思います。

「即興」について、辞書では「①その場の情景出来事などに感じて起こった興味。」②興にのって、即座に詩歌楽曲などをつくること。」と定義されています。これが「即興演奏」となると、『音楽大事典』では「あらかじめ決められた譜面に頼ることなしに、即座に創作しながら演奏すること」と定義されています。

『音楽大事典』では、即興演奏には演奏者が楽曲の構想にどの程度関与するかに従って、大別して三つの種類があると説明しています。まず一つめは、「既存の楽曲に対して演奏家が即興的な装飾を加える場合」。部分的な即興演奏ですね。二つめは、

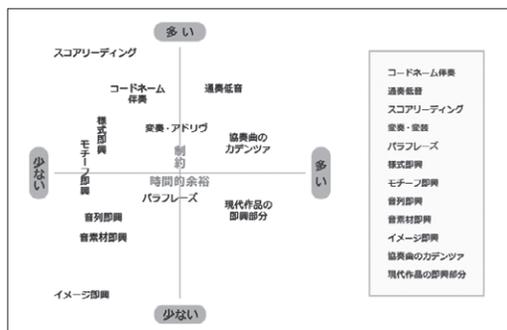
「与えられた主題を即興的に発展させる場合」。三つめは、「楽曲の構想及び実現のすべての面を演奏者が担当する場合」です。二つめと三つめは全体的、または純粹即興演奏などといわれるものです。理想的な純粹即興演奏では、演奏者の表現衝動が直接に音響を生み出して、その音響からさらに新たな表現衝動が生じると説明されています。この場合、音楽は演奏行為自体からつくり出されるので、表現を精錬して形式化するというよりも、個性に非常に密着したものとなるわけですね。演奏手段や演奏家の能力による度合いが高くなってきます。

このように定義づけられている即興演奏について、藤原嘉文氏は「即興伴奏」「編曲的即興演奏」「設定素材に基づく創作的即興演奏」「制約の全くない創作的即興演奏」「作品に設定されている即興の部分」の五つにカテゴライズしています。

このようにカテゴライズされる即興演奏を時間的余裕や制約の多少の観点をもとに図にしたものが下の図になります(図3)。「時間的余裕」というのは、即興演奏をするにあたって準備をすることができ時間が多いか少ないかということです。「制約」とは、即興演奏をする上での決まり事の多少です。時間的余裕については、少ないと演奏者が習得している要素ですとかパターンのバリエーションがどのようにつながついていくのかの予想がしにくいですね。その分、即興性は高まるわけです。先ほど皆さんがやったような即興演奏というのは、まさにそのタイプなんです。準備なしにやったところでは、自由度がとても高いわけです。

1. 即興伴奏	コードネーム等による伴奏、通奏低音
2. 編曲的即興演奏	スコアリーディング、装飾・変奏、バラフレーズ
3. 設定素材に基づく創作的即興演奏	モチーフ即興、音列即興、様式・形式即興、音楽材即興
4. 制約の全く無い創作的即興演奏	イメージ即興
5. 作品に設定されている即興の部分	古典協奏曲のカデンツァ、現代の音楽作品の中の即興部分

表 即興演奏の内容・様式別分類



藤原嘉文「音楽における即興演奏」(ヤマハ音楽研究所 web)

図3

制約要素が少ないと、何も無いところからつくるようなイメージがあつて、即興演奏を通しての自己スタイルの提示という面が強くなります。制約要素が多いと自由度が少なくなりますので、演奏者の創作性というのが弱まってくるんですね。ただ、聴く人にとっては理解しやすくて変化を楽しみやすいという利点もあります。



「ここまで音楽の「聴く」と「つくる」ということについて理論的に確認してきましたが、これらを実際に体験するということはどういうことなのか、ということを考えていると思います。

「体験」という言葉については、辞書では「実際に自分の身をもって経験すること」とか「個々人のうちで直接に感得される経験」などと定義づけられています。つまり、体験することであって、そこには精神性がかかわるということですね。音楽ではこのことを「表現する」と言い表しています。一般的に、辞書では表現について「内面的精神的主体的な思想や感情などを、外面的客観的な形あるものとして表すこと」ですとか、「外にあらわれること」などと定義しています。

では、この「表現」という言葉が学習指導要領の中ではどのように扱われているのかを見えます。まずは「低学年の児童は自己表現の意欲が強く、自分の声を精いっぱい出して積極的に歌おうとする」ですとか、「音楽に対する想像力も豊かになり、自己表現の意欲も次第に高まっていく」というような記述が見られます。どちらにも「自己表現」という言葉が用いられています。ですが、それでは、音楽を体験するということは、自己表現ということになるのかという疑問がわきます。

音楽における自己表現について、小川昌文氏は「音楽では言語のように、言葉のエンコードとデコードによって、意味をやりとりするものではない。音楽の発信者と受信者が共に向き合っ

て『形成』するのである」と述べています。また、小川氏は、音楽における自己表現について「音楽において、『自分のイメージ

や思い』が表現できるというのは誤った考え方であると思われる。『イメージや思い』というシニフィエ(意味)は必ずしも音楽というシニフィアン(鳴り響く音)と対応はしないし、さらに、他者の語法(楽器演奏等)に搦め取られてしまっている状態では、その児童、生徒「固有」の表現はあり得ないからである」と述べています。

つまり、音楽における表現では、「自己」という言葉がついた「表現」や、「自己表現」という観点を持ち込んで説明されることが一般的になっていますけれども、音楽でいう自己表現は単に自己だけで成立するものではなく、さまざまな要件や他者とのかわりの中で成立するものだということなんです。この事実から、皆さんの意識の中にコミュニケーションという要素が浮かび上がってきたのではないかと考えています。

音楽の表現の仕方の一つに、演奏というものが挙げられます。「演奏」について、辞書では「音響によって楽曲を具現し、聴者に伝える行為」と定義されています。『音楽大事典』では、演奏の基本的要素として「音楽を音響的なものとして実現すること」と「その音響に芸術作品としての意味を与え生氣あるものとする」との二つが挙げられており、これらが統一されることで成り立つのが演奏ということになります。また、「演奏者」については、「音の形成に関する諸条件を選択し、相互に結びつけ生き生きと働かせながら、自己の主體的な創造性をいかし、聴衆に意味を伝達するという点で創作者としての面を持つ。また自己のうちに音の像を享受し、作品をそのつど追体験すると

いう点で享受者としての面もつ」と定義されています。つまり、演奏するということは創作すると同時に享受もする行為で、一つの行為の中に反対の要素が同居しているものなのです。演奏において独創性という価値基準は重要なものですが、単に楽器を演奏したり、楽譜を音響効果で再現することとは異なるわけです。

音楽という行為は、昔は儀式などの慣習と結びついたものでしたが、だんだん作曲家と演奏家と聴衆の三つが分化してきました、演奏は大勢の人たちを相手にするようなものになってきました。こうなることによって、「演奏」という行為がそのものだけで評価されるようになってきたわけです。

こういった変化によって、社会的な観点から見た演奏の獨創性は、作品や演奏の深い精神性だけではなく、大衆の共鳴を得られるかどうかという興行的な意味も含むようになってきました。つまり、演奏というものは演奏する個人の問題ではなく、相手の共感を得られるかということであって、そこにコミュニケーションが存在するということなのです。

これまでを踏まえまして、改めて音楽を楽しむことについて考えてみたいと思います。そのために心理学的な側面からとらえてみたいと思います。須藤貢明氏と杵鞭広美氏は、音楽について「コミュニケーション・メディアとして『恣意的かつ作為的に存在』しているもの」と述べています。音楽はよく言語と比較されますが、言語は地域的だったり社会的規制のもとで存続しているものです。例えば、それぞれの国で使用する言

語というのは、規制された母国語というものがありませんね。地域によっては共通して使用できる方言などもあるわけです。これに対して、音楽ではそれに相当するものは民謡なども挙げられますが、言語のように地域的だったり社会的である規制というものはないわけです。須藤氏と杵鞭氏は、楽曲について「文化の発展過程において、自然発生的なものと意図的に創られたものがあるが、国家などの統治機関によって規制されることは少なく、どちらかといえば自然発生的に発展してきた記号といえる」とも述べています。これは、楽曲という範囲ではなくて、音楽という大きなくくりにおいても言えることではないかと考えています。

音楽社会心理学という分野がありますが、この心理学の主な問いは、「音楽は何のためにあるのか」というものです。これは、人類学や社会学の領域とか進化の観点からも議論されてきています。ハーグリーブス、ミエル、マクドナルドの三人は、音楽の機能を心理学的見地から見ると、大きく分けて「認知的領域」「情緒的領域」「社会的領域」の三領域があると述べています。彼らは、本来音楽は社会的な活動であって、かわり方が聴くことだとしても音楽をつくることだとしても、音楽は他者とともに行うだけでなく他者のために行うもので、音楽の社会的機能はある意味で認知的機能や情緒的機能も含むものだというふうに強く主張する人もいると説明しています。

ハーグリーブスとノースは、これまでの研究成果を踏まえて、音楽の社会的機能が最も明らかになるのは、「人」が対人関係、



気分、自己アイデンティティの三つを調整するときだと説明しています。

この三つについて説明しますと、二つめの「対人関係」は、私たちは音楽を、他者とかかわりを発展させて調整する手段として扱っているということです。このことで、音楽の好みからどのような社会集団に属しているか、属していかないのかということがわかるわけですね。特に、十代に顕著に見られるそうです。つまり、冒頭で皆さんに「どんな音楽が好きですか」とお聞きしましたがけれども、このようなよくある質問に答えることは好みの音楽について語るといっただけではなくて、自分がどのような社会的背景を持っているのかというのを話しているということにもなってくるわけなのです。

二つめの「気分」については、音楽を利用する理由が気分調整のためであるということです。その際には、音楽を聴く社会的な環境の影響を受けていることが明らかになってきます。

三つめの「自己アイデンティティ」についてですが、自己アイデンティティを確立して発達させることが音楽の社会的機能の一つなのです。音楽アイデンティティという概念によって、音楽と個人の間に生じている広範囲で変化に富む相互作用について考えることができるようになります。つまり、個人における音楽とのかかわり方というのは、社会と自己のかかわり方が反映されているということが言えるわけなのです。

以上の話から、きょうのテーマであった「音」を『楽』しむ、『聴く』『つくる』の体験とは」ということについてまとめたいと思

います。

まず、音楽は表現することだということですね。音楽の表現とは、つまりは「聴く」こと、「つくる」ことだということです。「聴く」には鑑賞が含まれていて、「つくる」には創作や即興ですとか演奏などが含まれています。聴くこともつくることも受動的であったり能動的であったりということにおいては偏ったものではなく、相互の関係の上に成り立っているものでした。そういった意味では、聴くこともつくることも「音楽」に参加することであるというふうに言えるわけです。

また、表現することは個人の中で完結することではなくて、他者や社会とかかわる中で成立するものだということです。そういう意味では、表現はコミュニケーションだと言うことができるわけです。

つまり、音楽を楽しむということは社会的な文化なのです。そういった性質を感じたり発信していくことが、幸せな音楽文化生活といえるのではないかと思います。また、このような音楽文化生活が幸せだと感じられることが、ポジティブサイコロジの一助になると私は考えています。

皆さんもぜひ、さまざまな形態の音楽文化生活を体感して、幸福感を持った生活を送っていただきたいと思っています。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 長谷川先生、ありがとうございました。(拍手)

フロアからの 質問に答えて

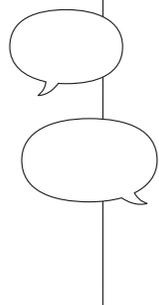
司会 予定の時間より少し押ししてしまいましたけれども、片岡先生を中心としてみんなのセッションが充実していたということです。一分ぐらいしかありませんけれども、せっかくですので細江先生、片岡先生、長谷川先生に、これはぜひ聞いておきたいというフロアの皆さんから何か質問なり……。ありがとうございます。お願いします。

参加者 すみません。長谷川先生と、あと、最初の細江先生に一つずつ。私、「参加する音楽」って最初に出てきたときに、これ何だろうと思いついていたんですけども、最後のスライドで、「聴く」のも「つくる」のも参加するというふうにまとまっていて、かえってちょっとわからなくなっちゃったんです。最初のスライドで三原色みたいな、あれが三つあってお互いに重なり合っているのがあったから（42頁 図1参照）、「聴く」でも「つくる」でもない参加があるのかなと思って聞いていたんですけども、そこが正直よくわからなかったもので、何に当たるのかなというのを聞いてみたいと思います。

細江先生のほうには、一番最初にQOL尺度という話があったんですけども、これではかえることができるかどうかがよくわからなくて、時間がないので、「この本に書いてある」みたいな情報でもいいのでいただければ。以上です。

司会 ありがとうございます。では、長谷川先生からいいですか。
長谷川 この「参加する音楽」という範囲が私の中では結構広いなというふうに考えているんですけども、一般的には「聴く音楽」と「自分で演奏する音楽」という二つのカテゴリーが一般的だと思います。

演奏を例にとって説明させていただくと、自分で演奏するということとは自己の中で完結しているだけではなくて、例えば合奏だつたり合唱という面では、一人で演奏しているわけではないうですよね。例えば合唱する際に、個人だけの中で完結しているとか合唱自体が成り立たないということができてくるわけです。調和がとれていてということだと考えると、合唱という演奏形態の中に自分が参加しているところがあるわけですね。



れども、そういう意味では「参加する音楽」というこのカテゴリーが非常に重要になっています。

片岡先生の即興演奏を皆さんでやったものがありましたけれども、もしかしたら皆さんが個人的に勝手に楽器や物をたたいているような意識を持っていらっしやるかもしれません。しかし、実は皆さんの鳴らした音を聴きながら、これぐらいの音でたたくとどうかなとか、無意識かもしれませんが、いろいろ考えていたと思うんですね。そういう意味では、そこにコミュニケーションが生まれているわけで、「参加している」という概念が非常に重要だと考えています。お答えになっていたでしょうか。

参加者 かなりわかりました。ありがとうございます。

細江 QOL尺度ということですので、後で具体的に文献等をお知らせしたいと思います。メールいただければそちらに配信して、文献等お知らせしたいと思います。ありがとうございます。

司会 すみません。時間が押せ押せで。あと片岡先生も、多分きょうで残念ながら一期一会でまた来てもらうということもできないと思うんですが、ぜひこれを聞いておきたいとか、ちょっと教えてくださいということはございませんか。大丈夫ですか。では、片岡先生から皆さんへのメッセージは。

片岡 一つ言い忘れたことがあるかなと思ひまして。学生の皆さん、将来子どもと接したりする仕事に就く方って……。

司会 半分ぐらい。

片岡 多いですよ。僕、いろいろ幼稚園、小学校、施設とか行くんですけども、いつも施設職員の方がちょっと音楽になじまないことが多いんですね。どういふことかというところ、先ほどの老人ホームは一年やっていたから結構なじんでいるんですけども、人がいるところに「はい、何々君。はい、パンパン」と言つて、しかも楽器を鳴らしながら近づけていく感じがある。それは、気持ちにはわかるんです。促しているわけですよ。促したほうがいいような曲は多分あると思います。「どう？」というのはあると思うんですけども、カチカチやりながら耳元でやられると、もううざいみたいなね。

だから、職務上そういうケアをするという役割があるから、その役割についてのっかり過ぎて、多分、すごくまじめにやるわけですけど、できれば比較的ほうつておいて、一緒に音楽の中にいるのがいいと思いますね。向き合つてこうという音楽ってあまりないでしょう。バンドとかでも、大体こういう感じじゃないですか。そういう感じで入つて、音楽の中に入る。職員さんだけ音聞こえていないということが多いんですよ。それは、お年寄りや演奏したときに、なぜかすーっと音が静かになつて終わつていったりすることがあるんですけど、職員さんだけ「はい、はい、はい」つて、「あれ、私だけやっていた」みたいなことが結構あるんですね。

だから、さっきの参加という話がありましたけど、音楽に参加するというのは、そういう鳴っている音のフィードバックが自分の中にあるということですよ。演奏していても、弾きな

がら「俺って天才」とか。何かわからないけど、弾いたら音が
出ますからね。出た音に影響されて動く。たつた一人で演奏し
たとしても。人の出した音との関係。「音楽をやる」と思っ
たため、「音楽になる」「音楽の中に入る」というふうになると、
とてもいい学校の先生だったり施設職員だったり保母さんにな
れると思います。

司会 先生、ありがとうございます。長く小学校現場にいて、
つい「音楽」が「音が苦」になっちゃう。苦しいという字になっ
てしまう。「音が苦」になっちゃうか「音楽」にできるかは、今の片
岡先生のお話に全てのヒントがあるなと思って。ちよつと私は
三十六年もバックできませんけれども、これから若い先生たち
のエネルギーがこれからの幼稚園や小学校をつくっていくわけで、
ぜひそういうふうな生かし方をしてほしいと思います。すごく大
きなヒントをありがとうございます。

本日はこういういい天気が高尾山もにぎわっていると思いま
すが、わざわざこの市民講座のために市民の皆さんが足を運ん
でくださいました。本当に公開市民講座として私たちがぜひお
招きしたかった方たちが、実はこのフロアに十二人、本当にお
忙しい中を来ていただきました。ありがとうございます。また、
本学の幼児保育の専攻と新しくできた生活心理の専攻の学生た
ちも、こういう機会をということで、四十七名も参加してくれ
た。私は司会者ですが、学生たちの一生懸命な姿がともうれ
しいです。そして本学のスタッフが十二名。さらに片岡先生を
入れると、何ときょうは七十二名がこの三時間弱を共有してい

ただいて、すてきな時間が流れました。まとめる気はございま
せんけれども、一人ひとりの中にきょうの音楽性が生かされま
すよう願っております。

きょうは本当にありがとうございます。(拍手)

Ⅲ

保育実技研修（4年生）

「たまっ子座」公演

* 幼児保育専攻 4年生、日野市立おおくぼ保育園 5歳児 参加
平成26年12月17日 開催

「たまっ子座」公演風景 52

質疑応答 54

「たまっ子座」公演

幼児保育専攻の特別授業として、おおくほ保育園の園児とともに、「たまっ子座」太鼓ライブを鑑賞しました。



「たまっ子座」

公演風景

たまっ子座

1985年創立。東京都福生市。太鼓の演奏と芝居からなる創作舞台を各地で展開。学校の鑑賞会や地域の文化事業などでの公演実績も豊富。



ドーン、ドーン。雷が鳴り響きます。

雷さまの子どもになりきった園児たちは、見事なバチさばきで大太鼓をたたきました。



息もびったり。動きもばっちり。
 たくさんの楽器の演奏あり、激しい動きのパフォーマンスありの公演では、
 1時間があっという間に過ぎていきました。



雷さまの登場！
 おおくぼ保育園の子どもたちも幼児保育専攻の4年生たちも
 食い入るように見えています。



どうやって鳴らすの？ どんな音がするの？
 学生たちは、初めて出会った数々の民族楽器に興味津々。
 思い思いに楽器の音色を感じ楽しんでいました。

公演を終えて

質疑応答



「子どもを育てるとは」「音を楽しむには」という、保育者としての就職を間近に控えた学生たちにとって重要なテーマでお話いただきました。

たまっ子座の皆さんを囲んで

団員 a (座長の奥様) (たまっ子座の演奏は)どんな感じでしたか。

司会(井口) まず、感想を聞いてみましょうか。どうでしたか。

学生 おもしろかったです。本当に単純におもしろかったです。

司会 自分自身が楽しめましたよね。

学生 子どもたちも笑顔だったし、一緒に見られてよかったなと思いました。

司会 「一緒に見られてよかった」。子どもたちの素直な反応を間近に見るといっても楽しいと思います。実習の中でもいろいろな行事などがあつたとは思いますが、またそれとは違い、リラックスした気分でも、自分も心から楽しみなで見るといふこの機会はよかったですね。

おおくぼ保育園の子どもたち、本当に太鼓が上手でしたね。数日前にお楽しみ会で太鼓の演奏会をしたということですが、バチの持ち方とかしつかりやってみましたものね。どうですか。では、Sさん。

学生 初めてこんなに近くで太鼓の演奏を見たんですからけれども、いろいろな音が出るんだなと思ったし、太鼓の世界に引き込まれました。

司会 そうね、聞いてみましょう。Sさんのように太鼓の演奏を初めて見たり聞いたりした人は？(学生の三分の二程が挙手) あっ、結構いるんですね。では、何かで見たことがある人はどういふところですか？

学生 お祭りだとか小学校の運動会のとときに。

司会 ああ。では、太鼓をたたいたことのある人は？(十名程の学生が挙手) いますね。どんなところで？

学生 小学校の運動会。

司会 やつぱり小学校で。

学生 保育園で。

司会 「保育園でやった」。記憶に残ってるの？

学生 園が和太鼓を熱心にやっていて、それで年長さんの発表会のときにやりました。

司会 やはり保育園とか小学校などでやった経験がある人が何人かいるんですね。

どうですか、何か伺ってみたいことはありませんか。貴重な機会なので、ぜひ、こういうときに。

学生 太鼓に関係なく、聞いてみたいとみんなが思ってることなんです。

学生 (団員のお二人は) 双子ですか。

団員 兄弟です。

劇団に入りたいきさつ

司会 じゃ、私も。どういうきっかけでこういう劇団に入られたのか、すごく知りたいなと思うんですが。

座長 (たまつ子座代表) 私は宮城県の石巻の出身で、高校を出てすぐに東京に来ました。演劇の道に入って、皆さん知ってる「新劇」というんですけれども、舞台俳優を目指してやってきました。十年ぐらいやったときに、私は、舞台でしゃべったり、それから身振り、そういうことだけが演劇だと思っていたんですが、演出家から、「表現というのは言葉や態度だけじゃないんだよ、全てが表現になるんだよ」とこう言われて、それに対抗したわけではありませんけれども、じゃ、今度は言葉を封じ

て、太鼓で表現してみようということになりました。それをずっとサークルでやっているうちに、じゃ、芝居のような、太鼓のような、言葉の代わりに太鼓に芝居を持ち込む、そういつたことをやってみたいなと思い、始めました。それで約三十年たちます。私がやり始めてからほぼ五十年ぐらいでしょうか。そんないきさつでこの劇団をつくりました。

団員 a 彼が劇団代表で、きょうの公演の作・演出、作曲者です。

司会 そのときの状況に応じてアレンジしたり、また、目の前の子どもたちの様子によつて演奏をその場で少し変えたりして演出されると伺いました。

座長 最初、太鼓をやったときに、まさか子どもに見せようとは思わなかつたんです。ましてや小さい子どもなんかはうるさいなと思つていたし、わかりやしないだろうと思つていたんですけれども、一般公演をやつて、大人対象にしてやつたときに、「子どもにも見せたいね」みたいな話があつたんですね。で、幼稚園、保育園の先生が呼んでくれて、「まあ、わかんないだろうな」と思いながらやつたんですけれども、○歳児が保育士さんに抱かれながら、一歳児の子どもですが、一時間ちよつとの太鼓を見てたんです。もちろん、こういうパフォーマンスを入れたんですけれども、それで、「あれっ」と思つて、おはあちゃん、おじいちゃんはもちろん好きですから、子どもから大人まで、もしかしたら通じるんじゃないかなと思ひ始めて、子どもにも見せるようになりました。それしたら、やつぱり一時間、泣きもせず本当に集中して見てくれたので、「これは何だろうな」と考え始めて、そこからいろいろな曲がまた生まれましました。最初は、こういう子どもたちに見せるつもりは全くなかつたんです。ただ、人間として共通するものが太鼓の中にはあるんでしょね。それ

が何なのかはまだよくわかりませんが。

司会 私も、「たまつ子座」といって、幼稚園、保育園で演奏されるというイメージがあつたんですけれども、では、大人の公演とかも？

座長 もちろん、そうです。

子どもと楽しみを共有する

司会 では、奥様はどういういきさつでお入りになったのですか。

団員 a 私は「たまつ子座」の前に十年ぐらい、子どもたちのための小太鼓をたたくお芝居をやる団体に所属していて、その後、「たまつ子座」をつくることから始めました。だからもう三十年です。こちらの団員二人は息子です。二人で始めて、ほかのメンバーもいました。太鼓を言葉の代わりにという、まだ本当にわからないけれども、何か漠然と表現する、通じ合う、伝え合うということができそうな気がして。どこかの伝統芸能はその地域の方が生活の中で受け継いできたものですから、その祭りの太鼓はその方たちが何といつても一番ですので、私たちがやるとしたらやっぱりオリジナルでこういう舞台とか、何かいろいろな場をいただいて、そこで向き合って、こちらも何か、思いなり、テーマなり、メッセージなりを持って伝える。その場で反応をしてくれるのを、またいただきながらやりとりをしてという作品づくりを、太鼓を中心に、でも太鼓だけではなく、作品によってはせりふを使う、いわゆるお芝居もやるんです。いろいろな作品があつて、曲数だけ数えると一七〇〜一八〇、長いものも短いものも座長が中心になって作曲していて、お芝居も、社会派のお芝居もあれば、民話仕立てのお芝居もあれば、いろいろやっています。

皆さんも子どもたちと向き合う仕事とかをされていきますけれども、自分が思うだけではなく、それを伝える。で、伝えて、ともにそれに共感して、「ねっ、そうだよ」と楽しみを共有するってとても大事ななと思って。そのためには、まず何かを出さないとならないし、やはり私たちがだったら、「この曲、楽しい？」「楽しいよね」と思いを共有して、それで返ってくるものをまた受けながらつくっていくという感じで、気がついたら三十年なんです。子育てと同時に進行にやってきたものから、長男は劇団と同じ年で、三十過ぎになってしまったんです。だから、本当に、お腹に赤ちゃんとしているときから太鼓を聞いていて、夜になると、みんなが帰った稽古場で遊んで、みたいな感じで育ったので、入ったとかいうのは自然な成り行きで。細かいところは本人に質問してください。

団員 b(長男) 僕は高校まで行って、その後すぐに劇団に入りました。で、本当に舞台上に最初に立ったのが小学校の一年生ぐらいでした。休みの日でも出演できる日はずっと劇団について行ったり、海外にもいろいろ行ってるんですけども、そのときは学校を休んで、長いときは一カ月ぐらいアメリカに行っていたことがあります。だから、自分としてはすごく最高、舞台上立つというのはライフワーク的にもしみ込んでいて。高校は割と進学する系の高校だったので、大学に行かない子のほうが少なかったぐらいなんですけれども、そんな中、学歴がどうのこののじゃないという雰囲気を感じたのと、やっぱりずっと手伝ってきて、劇団的には結構戦力になっていたので、入れとも、ほかの職業につけみたいなことも言われなかったと思うんですけども、何となくプレッシャーを感じつつ、「八百屋の子は八百屋だろう」みたいなぐらいの感じで。まあ、

でも、嫌いかと言われれば、舞台は全然嫌いではなかったもので、この道だろうなど。別にすごく確固たるものがあつて、「入ります」とここをたいたわけではないんですけれども、さっきも言ったように、少し成り行きの部分と、今まで歩んできた人生を重ねると、この道なんだろうなと思つて今やっています。

団員C(次男) 僕は違つて、当然、弟ですから、幼いときとかは一緒に行動して、太鼓も、遊び場みたいな形で遊び道具として使つたので、体にしみついているのかなということはあつたんです。けれども、僕は学校の先生になりたくて、高校も進学校に行つて、大学は教職課程のある大学に行つて、ちょうど皆さんぐらい、ちょっと上かな、三年生か四年生にかけて、僕は当然、学校の先生になつて思つていたんです。でも、みんなが教員免許を取りながらも徐々に就職活動みたいな感じでやっているのを見て、一緒に教職課程を歩んできた仲間たちが、「いや、資格は取るだけだから」みたいなことで、それこそ銀行とか、会社とか、そういうところが就職活動をしているのを見て、仲間たちの職業を選ぶ基準というのが、もちろん理由としてはわかるんですけども、やりたいことをやるというよりは、どちらかという安定とか、親に迷惑をかけたくないとかだつたんです。僕は幼いころから舞台の上で本気で表現する大人たちにずっと触れてきたということもあつて、働くということは生きるということだと思つていたので、自分がやりたいことと、それでお金をいただいて生活するということは違うという考え方をする人たちと、どうも波長が合わなくなつてきて。じゃ、現実を見ると、大学を卒業して就職をして、一年二年で辞めて、また転職してとかという形で、職業選びがアルバイト選びみたいな軽さになつてもなつて

きてしまつて世の中で、しかも、デスクワーク中心というか、汗水を垂らしてという言葉がおよそ似つかわしくないような業種もすごく増えてきていますよね。第三次産業というか、自分の扱っている品物がどこでだれが買つていて、それがどういうふうに使われているかわからないという状況の仕事をしつつ、それで自分の子どもたちや家族を養つていくよりも、汗と涙がしみ込んだ仕事でもらつたお金で生きていくという感覚というのをやはり大事にしたいというのがありました。それとふと、じゃ、自分が本当に学校の先生になるのかと思つたときに、目の前にいる子どもたち、この子どもたちにとって、今、学校とか、あるいは幼児教育の現場なんかが本当に子どもたちの成長のために、子どもたちの未来を願つて活動しているかということにすごく疑問を抱いたんです。それは、劇団として学校公演について行つていたりもしていましたが、大学生のころは少し劇団を手伝つていたので、いろいろな現場に行くと、どうしても子どもが管理されて、管理するために大人が付き添つていて、管理するための声かけをしていて。こういう子どもたちに何かを気づかせてあげたいと思つたときに、もしかしたら、自分がこの家に生まれてきたというのは運命なのかなと思つたときに、自分がずっと幼いころから生活していく中でしみついてきた表現するという力をやはり使いたいと思つて、で、大学卒業と同時に、もう一度勉強をし直してというつもりで劇団のほうに入れてもらったということとです。

司会 私も教職課程のある大学を出て、そのままレールに乗つて子どもにかかわる仕事に就きましたし、しかも、公務員という形で、お給料という意味では安定していました。ここにいるメンバーはほとんどが保

育者で、あと何人かが企業に勤めますよね。それぞれ考えているところもあるかもしれないですが、今の段階でそこまで深くは考えず、何となくレールに乗っちゃったな、という人も多いと思うんです。私もそうでしたが、本当に今のお話のとおり、そのままボンとレールに乗れたのはいいけれど、先生になつてから、子どもたちにどれだけのことが伝えられるのかなと悩んでいた時期というのはしばらくありましたね。団員の皆さんのような人生のほうがかつたのかなって考えるところもやはりあったんですよね。でも、教員をする中で、こういうすてきな方々の刺激をいっぱいもらったりとか、周りの方からお話を伺ったりすることで、少しずつでも自分を太らせていくしかないなって。それを子どもに伝えていくというふうにならずに考えられるようになってきました。きっとみんなも、「自分の人生、これでよかったのかな」と悩むところはたくさんあると思うけれども、ぜひ、一歩ずつ前に出るためにも、こういうすてきな方々に出会うきっかけをたくさんつくりながら進んでいってもらえたらと思います。

舞台も衣装も全部手づくりで

団員c 一つ大事なことを忘れていました。貧乏なんですよ、はつきり言う。子ども心に、例えば、母が持たせてくれる学校で使う絵の具セットは母が使っていたものだったりとか。でもそれは、入学しますといつて一斉に学校で買わされるものを買ひ与えたくないと思つたということの後から聞かされて。もちろん、絵の具があれば授業は受けられますし、縦笛は別にみんなと一緒に吹けないということはないので、木のものを用意してくれたりとか、いろいろそういう、まあ、物理的に

ぜいたくできる環境ではなかったんですけども、考えなしに商品子どもに与えるということをしてこなかったたので。それはすごく僕たちにもしみついていて、例えばきょう使つた道具、太鼓はもちろん買ったものもありますけれども、舞台とか衣装とか、全部手づくりなんです。普通、劇団さんは外注といって外に発注してつくってもらつたということ、それをプロにして仕事をしている方たちもいるので、それももちろん手としてあるんですけども。でも、やっぱり自分たちでつくつたもの、手づくりしたもの、手づくりした曲、手づくりした表現、自分たちでつくつていったものじゃないと、やっぱり子どもたちに見せられないなとすごく思うんです。

新しいものをやろうとといったときに、まず買うということよりもつくるということのほうが頭に第一に浮かぶので。適度に、もちろん寝泊まりするところがないとか、そういうレベルではないんですけども。「ない」となったときに、では用意しようとなったときの用意の仕方、やっぱりこういうきれいな入れ物に子どもたちを入れてしまつと、どうしても、木のおいとか土のおいとか、自然としてそこにあるものを見立てたり使つたりして遊ぶという経験がどんどん減ってきている中で、そういう一つひとつの遊び心というのか、それを忘れたくないという気持ちがあつたんです。けれども、あまりに経済的にちょっとあれだなと思つて、それで、少しは人並みの生活ができて、やりたいと思つた仕事というのは何だろうと考えたときに、中学生ぐらいのとき、じゃ、学校の先生かなと思つた、そういう話だつたんです。だから、一つ悩んだ点といえば給料の問題ですかね。それはあります。

体にしみついた表現

司会 では、このようなすてきな皆さんに何か質問をぜひ……。

学生 こつちで見えていて、どうやってリズムをまとめているのかなというのをすごく疑問に思ってる。やっているとすごくアイコンタクトをとっていましたか、そういうものも関係しているんですか。アイコンタクトもリズム、演奏するうえで大事な一つの要素なのかなと感じたんですけれども、それはどうなのかと……。

団員 a 曲づくりは座長が主にやるんですけれども、稽古場でこういうリズムと、口で「ドドンコドン」とか「スットントン」という、いわゆる口唱和とか、日本の伝統的に覚える、習うやり方、口伝えをしてということがあるんですけれども、楽譜にいきなりオタマジヤクシを書いていくのではなく、「ドットントン」とか「トントン」とかって、強弱も気持ちも間合いとかも込めて、イメージを作曲したものを耳で聴いて、すぐにたたくてみて、で、あつ、こういうふうなたたくたたきやすいとか、左右をどう使おうとか、体を変えたら強い音が出るとか、見えてイメージが広がるとか、そういう要素を盛り込みながら立体化していくんです。なので、だれか指揮者がいて、このテンポでいきましようとか、四分音符が六十とか、そういう世界ではなく、感じるということか、感じを感じ合うためには目で見たりもするし、仮に見なくても気配というふうなもので感じたり、お腹、息でハッと合わせたりします。そうすると、生き物のように音楽も血が通ってくるというのか。あと、それぞれの楽器の音色とかボリュウムに自分の神経を集めると、ほかの音が鳴っているときに、どこにこれを入れたらそれぞれが生きるか

なというのは、そのときの気配でつくっていくのかな。あと、入れ物によっても、ここは結構吸音されますが、すごく響く、トンネルの中のような残響の長いところでやるときと、そのときの歯切れのよさとかで、また違ってきます。そういうのが数値化されたものを数量計で見ていることではなく、響きを聴いて、お互いに感じながらつくっていくということですね。

口伝えというのは、子どもが実はその一番達人というか、楽譜に書いてとか、忘れちゃうから書いておこうというのは大人の作業で、子どもには必要ないわけです。もう本当に三歳四歳ぐらいからどんどん体で覚えますね。覚えたことは忘れないからすごいなと思います。だから、幼稚園に太鼓指導に行ったりもするんですけれども、そのときも譜面は一切使わないで、口で言ってる、すぐにたたいて、「大きい音をたたくときはこうやってやろうね」とか「小さいときはこう」と、身体表現も含めて、見よう見まねをしてもらっていきんです。だから皆さん、子どもの前に立つときに、全部見られているし、どういう表現をしているかを子どもは見えていて感じ取るので、理屈で、「これはこうですかこうですね」と「じゃ、こうしましょう」と「これが正しいんですよ」というのをできるようになるのはもつと上の学校に行ってるからことなので。幼児は先生方が何をふだん考えているかというのをキヤッチするのは上手だし、「きょうは何か機嫌がよさそう」とか、そういうのもすごく見抜くし、何気ない先生同士の会話を聞いて、「あつ、こういうふうな人間というのは会話するんだ」というのを覚えていくので、日常的な立ち居振る舞いが全部子どもにも影響していくというのにはちょっと思っていたほうがいいんじゃないかなって。結構、幼稚園、保育園でも公演

するので、いろいろな若い先生、頑張っている方、いらっしやるんですけれども、意外と、自分が「ここ」と思ったところじゃないところを子どもが見てまねしてたりするので。それもまた楽しくもあるんですけども。

大人同士がつくり出す空気感を大切に

団員c もう、皆さん、実習とかに行かれたんですか。じゃ、現場の雰囲気というのは、それぞれの園でやっぱり？

司会 それぞれ実習で（現場の雰囲気を）感じ取って帰ってきています。

団員c 具体的には、今、ちようどすごくいい質問が出たので。私たちはこういうことを仕事にしていますので、それこそ、そのときの空気とかタイミングはすごく大切で、それを外すと、お客さんにとっても、「あれっ、何だかな」と思うようなことになってしまいます。でも、例えば、そこ、今、工事していますけれども、あそこにはあそこの空気感というのがあって、それにふさわしい行動を一人ひとりのプロフェッショナルがとっていると思うんです。やっぱり保育とか幼児教育の現場というのは大人だけではない関係、子どもがそこに入り込んでいますけれども、やっぱり大人同士がつくり出す空気感というのはすごく子どもにビリビリ伝わるといふことは、実習とかに行かれて多分わかると思うんですが、それが本当に、どんないい話や声かけよりも子どもにすぐストレートに伝わってしまうと思うんです。

いろいろな保育園、幼稚園でやらせていただいているので、いいところでは、若い先生も、それからベテランの先生たちも一緒にきょうのように楽しんでくれて、作品に心を寄せてくれて、子どもと一緒に楽

しんでくれるんですけれども。やっぱり、例えば子どもの人数が多かったりとか、あるいは季節によっていろいろ問題があったり思うんですけれども。太鼓の演奏というのは突然に終わったりするじゃないですか。そうすると、多分、先生同士が打ち合わせをしたくて、その辺の横だったら大丈夫だろうと、子どもの横で打ち合わせをしたんだけど、太鼓が鳴っているので聞こえないんです。そうすると、太鼓に負けない声で打ち合わせをしようとなりますね。曲が突然フツと終わったときに「ゲロ袋」と聞こえたんです。その辺で「あつ」となったんですけれども、それって、子どもにとってはその曲の一番が「ゲロ袋」なんですよ。多分、インフルエンザかノロウイルスなんかの季節の前に、「あれをどうしておくんだけ？」みたいな打ち合わせだったと思うんですけれども、まず、そこで今しないといけない打ち合わせなのかというのと、大人にどう見られるのかももちろん大事ですけれども、やっぱり子どもにどう見られるかというのは非常に大事です。かといって、よく見せろと言っているのではないんです。よく見せることというのは限界が来ると思うんです。いろいろと経験があると思うんですけれども、特に女性同士というのは、中学校、高校ぐらいというのは人間関係、すごく難しいと思うんですけれども、八方美人とかそういうことではなく、人間として見られるということなので、要するに、見え方を鍛えるのではなく人間力を鍛えるしかないと思うんです。だから、さっき、いろいろ、アドリブというお話を先生もしてくださったんですけれども、何か意図したことと違うことが起こったときに、どうそこを自分の人間力で切り抜けるかということがもろに出るのが舞台だと思うし、保育や幼児教育の現場だと

だから、一見、関係なさそうですけども、友達と遊ぶとか、いろいろな本を読むとか、芸術作品に触れるとか、旅をするとか、自分にとって、自分が生きていくうえでプラスになること、プラスになるだろうと思っ
てやらなくてもいいんですけれども。そういう一つひとつの生活態度と
うか所作というか、例えば、物をとるとり方一つでも、そのとり方を
子どもはまねをしますし、だれだれちゃんに声かけをしているその声の
かけ方を子どもはまねをしますし、声をかけられたほうは、そういうふ
うに言われたとおりに友達に言いますよ。だから仕込みなんかをして
いると、「何とかで何とかで、何とか君、だめでしょう。はい、歌うよ、ジャ
ンジャン」みたいな、よくそれでピアノを弾けるなど本当に思うんです
けれども、毎日毎日、子どもを相手にしているとそういう感覚から、多分、
優先的にまひしていくんでしょうね、業務的というか。その辺は非常に
気をつけていたきたいですし、きょう、ここで、せっかくこの場に居
合わせている皆さんは、自分がそうなっていないかなというのを、一週
間に一回、一カ月に一回ぐらいは、現場に入ったら省みていたきたい
なと思います。

それは、なれてくればくるほど地が出ますので、それはふだんのき
れいな言葉づかいとか、きれいな言葉づかいと言うとちよつと語弊があ
りますけれども、美しい表現を探すというのか、そういうのに、自分が今、
興じている、例えばこのテレビ番組は自分の人間力を高めているのかなと、
ちよつと疑問に思ったりとか、質の悪い番組だなど思ったら思い切って
消してしまうとか、そういうこと一つとっても必ずプラスになっていく
と思いますし、逆に言うと、子どもたちはいろいろなものを外の社会
で吸収してきて、それを保育とか幼児教育の現場でどんどん披露しま

すよね。例えば戦いごつことかで、「撃った、死ぬ」とかいうこともそ
うだと思えますし、マスコミが流しているCMのまねをしてみたりと
かいろいろあると思うんだけど、そういう現場に居合わせたとき
にどういう対応をするかというのは、テクニクではなく人間として
の力の問題だと思うので、それを怠らないようにしてほしいなと思
います。

座長 保育園の話をするとうさわりがあると思うので小学校のこ
とを言うと、一緒に見て楽しんでる中で採点している先生がいるんだ
よね。これ、だめね、こういう人は、こういう先生はだめですよ。生
徒の中に入って一緒に笑ったり拍手したりする、そういう先生は丸だと
思うんですがね。単純なことなんです。そこで、生徒の立場に立て
るかどうかということなんじゃないのかな。守れるかどうかということ
だと思えます。私にはいろいろなところに行きますから、単純には言
いません、ここはいい学校であるとか、ここは悪い学校とかは言いま
せんけれども、子どもたちがとても活発に手を挙げたり集中力を発揮
するのは、先生たちがいいところです。先生たちの団結というか、気
持ちは澄んでいるところは子どもたちの心も澄んでいますよね。です
から、そういうことなんです。うんとしがらみがあると思うんですが、
そういうしがらみを超えて、何のためにここにいるのかということ、
やっぱ生徒のためですけども、現実を見て、そのことだけを考え
ればいいんじゃないかなと思います。そこから逆に社会のことが見えて
きたりするし、社会と闘っていく、矛盾と闘っていくという力も湧いて
くるんじゃないかなと思いますね。今、彼が言ったことはそういうこと
なんじゃないかなと思います。

好きなことを一生懸命やれば道は開ける

座長 私だって、いろいろなことをやってきましたけれども、好きだからやってこれたわけで、好きなことだけをやってきて、あまり偉そうなことは言えないんですけども、それが、貧乏であるとか、お金があるとかないとか、そういうことは一切関係ないです。自分が信じたものを好きなだけやる。息子たちにも私は、「こうやれ」と言ったことはありません。劇団に入れとか、先生になると言うから、あつ、よかつたなど、おれに少しくれと言うぐらいで。私のおやじも先生で、兄弟も全部先生で、それに逆らつて私が演劇の道に入ったんですけれども、東京に出てくるときに、親は絶対に演劇の道はだめだと。じゃ、学校の先生になるからと言って、音楽大学を志望しました。そこだとすぐに落ちると思つて。そうしたら、運よくというか、運悪く受かつてしまったので、まあ、いいかと思つてしばらく音楽大学にいたんですけれども、でもやっぱり演劇の道をあきらめられなくて。何を言いたいかというと、自分の好きなもの、好きな人でもいいです、好きなこと、好きなものを一生懸命やっつけば何か道が開けてくるんじゃないかなと。それだけだと思えますよ。

子どもの発想からつくります

座長 だから、演劇の道を通じて私は子どもが好きになりました。子どもの遊ぶところに行つてよく見ていると、いろいろなことを遊んでいきます。でも、あれは創造的な遊びです。そのことがすごくこの作品の中に反映されていますので、子どもをよく観察しているという

なことが発想できます。「たまつ子座」の作品は私だけがつくっているわけではありませんけれども、そういう子どもの発想というか、子どもの考えること、行動すること、そういうことを見ながら物事をつくっているの、全てが子どもの発想でやります。子どもの発想というのは大人になつてもずっと続くわけで、だから大人もきつと喜んで見てくれるのかなと思います。あるアメリカの学校に行ったとき、質問があつたんです。いい質問だなと思いました。「太鼓の中には何が入っているんですか」という質問なんです。普通だったら「何も入ってないよ、空っぽだよ」と言うところなんですけれども、それを聞いたときに、打ち方とかいろいろなことでも太鼓の中からいろいろなものが生まれてくると想像したんですよね、子どもが。その感性というのはすばらしいなと思いました。大人はそうはなかなか見ないのではないかなと。

それからもう一つ、いろいろな題名、作品に題名をつけるんですけれども、太鼓を最初にやつたときに、子どもがここに寝転んで、こうやつて見始めるんです。普通だったら、先生がだめよと言うんだけど、始まる前にだめよはなしにして、どんな態度をとつてもいいから、とにかく黙つてくれと言つて始めたんですけれども、お腹に床から響きが聞こえたんです。そこから発想して、『ドドンとへそから』という作品をつきました。やつぱりへそから感じてくるという子どもの発想というのは大人にはないですね。だから、これからいっぱい、そういういい言葉とか、いい子どもの体験で感性を学ばずです。それを自分のものにする、いい保育という大変ですけれども、一緒に学べるんじゃないかなということ私は思いますね。やつぱり子どもから学ぶんです。ねつ、そうでしょう？

音を楽しむために

司会 今のお話が本当に心にしみるといふか、きょうは私、もう思い切り、手放して楽しませていただきました。でも新卒のころ、おっしゃるとおり、もちろん楽しもうとしているんだけれども、自分のクラスの子どもがびよこびよこしてると、「静かに」とか言っちゃうんですね。自分のクラスの子たちがびよこびよこしてると、「ねっ、しっ、静かに」なんて。もうそれで半分楽しめなくなってしまうというのがあるんです。でも、先生自体が楽しむとか、みんなもドーンと感じたと思うけれどもお腹で感じるというお話なんかも、心がそちらに向いていれば感じられることだと思っんですね。

ちよつとお伺いしたいことがあるんですけども、私、長く現場にいた中で、今でもすごく反省というか、できなかったなと思っっていることがあります。幼稚園には、お見せいただいた民族楽器などもあったんです。けれども、楽しんで見せるということがやり切れていなくて、子どもはひととおり、シャンシャンシャンとそういうものをさわるんだけど、それで終わってしまった。一方、行事となると、「はい、じゃ、クリスマス会に向けて、『あわてんぼうのサンタクロース』、みんなでしましょう」と一斉保育になっちゃいます。何か、音を楽しむという、真ん中辺のところ、子どもが自由に楽しむというところがどうも一番できていなかったなという思いがあります。もちろん、ふだんから歌ったりとか、いろいろやってはきましたけれども、自然に音を楽しむというところができてなかったなと思う自分があるんです。それはきつと、楽しそうに見せるということが欠けていたのではないかなと思っんですね。

ぜひ、現場に出るメンバーに、音を楽しむという点で、アドバイスなどを少ししていただければと思います。

自然の命をもらってできている楽器

団員 a 中ごろで楽器の紹介をしましたね。あれは、要するに全て自然のものからできている楽器なんですね。「たまっ子座」で使う楽器はほとんどそういったものです。プラスチックとか、子どものほうが石油化学製品とかに普通になじんでいるんだけれども、まずは、自然の中にいろいろな音が息づいていて、それに耳がとまるというのか、そういう自分の感性、音があつて楽しいなとか、しみりしちやう音だなとか、音から心が動くということを大事にする、そこがまずスタートラインです。お店に行つて、幾らで楽器を買ってきましたという、それこそバイオリンなんか名器と言われたら値段がつかないようなそういうものもあれば、その辺で私たちでもできるなみたいなものから幅はいっぱいあるんだけれども。要は、まず自分がその音色に心が引かれているか、動いたかという、あるいはやってみたくかと思つたかがあれば、「ねっ、こんな楽器があつたよ？ どんな音がするかね」と子どもの前で、打ち方とか演奏の仕方とかではなく、まず音色、「いい音だね」というところが第一歩。それをまず自分で見つけるというか、もちろん既製品の楽器でもいいし、自分で工夫すればもつと愛着も湧くから、みんなの手づくりすれば、同じようにつくつてもそれぞれ違って仕上がるので、そのよさもありますね。子どもと一緒に楽器づくりをしてもいいし、まず音を楽しむ心、音色の違いを楽しむ、そういう耳を鍛える。よく私も話すんですけども、今の子どもたちは生まれたときから電子音に囲まれて、家の中でもピンボー

ンと鳴ったり、電話の音だったり、携帯の音だったり、遊び道具も本当に電子音ばかりになっていて、きょう出てきたような竹の楽器とか、木をちよつとコンコンとたたくだけ、大きいと小さいでは音色が違うとか、そういう自然が持っている音色に親むチャンスがすごく減っているの、ぜび保育の中で、そういうことに気持ちがあ動くような体験をつくってあげてほしいなと思います。

自然の命をもらったと言いましたけれども、やっぱり何百年も生きていた木から生まれた呼子というの、それだけで、子どもにとつても言葉で説明しなくても深い響きがあるし、あるいは牛という力強い動物の丈夫な皮を団員が思い切り打つてもまだ足りないというぐらゐの重低音、そこから感じる気持ちとか、木の実をちよつとひもで結んだだけでもカラカラという優しい音がする。自然が少なくなっていく生活であればあるほど、そういったものを身近に楽しめる心を小さいうちにいっぱい育ててほしいし、子どもと一緒に散歩に行ったら木の実を拾ってくるとか、木の葉がカサカサいうのを拾ってきて、ちよつと箱に入れて振るだけだつて音がするんです。まずそこが興味の一步で、いきなり合奏しますとか発表がありますと言うと、大人は、まずリズムを正確に打てるかを覚えさせて、間違わないように指導を何度もしてとかといきがちです。でも表現というのは、自分がここにいて、この音を出してうれしを見てくれる人がいて、さらにうれしというこの関係がまず大前提だから、そのための発表の場と思わないと。よくできたクラスは丸で、「あなたのクラスは指導がイマイチなんじゃない」と思われるんじゃないかと思つたら、それはだれのため、ということですよ。

音を楽しみ合える感性を育てる

団員 a 子どものために、子どもが音楽が好き、演奏するのが好き、みんなでやるのが好きという心をどう育てていくかで、発表なんていうのはその中のある瞬間であつて、それを超えてもつとぐつと伸びていくこともあるわけだし、だから、子どもの立場で心の動きを大事にする工夫を自分なら何ができるかなと。それをぜび、モノの本で知識からやるのではなく、実体験で、自分で探してほしいと思います。それが楽しい探し方、やり出すと楽しいんです、楽器なんかつくるのは。うちなんかでも竹の楽器はいろいろあるんですけれども、きょう紹介してないものもあつて、つくればつくるといふほど、「ああ、いい音だね、これはどう？」と、どんどん発展していくといふのかな。

あと、彼（座長）も言つたけれども、つくる、クリエイトするという、創造するといふのはとても大事なことで、子どもが大きくなっていくときに、消費者という、物の価値を費やしていく人ではなく、消していく人ではなく、クリエイトしていく、つくっていく、それをおもしろいと思える子どもを育ててほしいと思ふんです。既製品をお金で買ひ与えるのではなく、工夫してつくつたらこんないいのができたねといふのを喜び合える、その体験をいっぱい積んだ子を学校に送り出してほしい。学校とかに行くとき既にものが待ち構えていますから、そうなくても自分の個性が発揮できるような、それを音を通してでも十分いろいろなことができるの、竹はすごくお勧めです。工夫のしがいがある素材です。

自然のものだけではなく、例えば、発泡スチロールとポリタンクと、それから穴があいたようなお鍋とか、フライパンとか、木でできたプラ

ンターのおけみみたいなものとかを並べて、それをただたいていくだけですごく楽しい音色が聞こえて、みんなで合奏するという演目があるんです。楽器じゃなくても、身のまわりのものでも十分音は楽しめるので、子どもがみんな持ち寄ってきたそういう楽器で何か音楽会をやるというのだって楽しいと思うし、要は、音を楽しみ合える感性を育てるといって、それが大事だなんて思います。

司会 さつき私がお話ししたように、運動表現とか造形領域に比べて、音楽領域というのは、自由な遊びの中でどうやって音を楽しむかというのができていないのが保育現場の現状ではないかと感じるんです。音楽というと、「みんなで演奏します」といった形になりがちかなと思うので、ぜひ、今のお話あたりはしっかりと心に刻んでほしいと思います。

座長 ある小学校で合奏をやったときに、ハモニカを、「あんだ、下手くそだから」といってガムテープを張ってやらせるところがあるんだって。
司会 ピアニカのチューブを抜くということもあります。指はやってるんだけど、ピアニカのチューブを抜くって。

一同 ええっ。
座長 そういう人間にはならないでくださいね。

自然を守り、自然を楽しむ

座長 それと、彼女（団員a）に続いて言いますけれども、本当に自然が楽しめるかどうかじゃないかな。だから、今からでも遅くないから、山に行ったり川に行ったり海に行ったり、そういう自然の中で、何もしなくてもいいんです、ぼーっとしていてもいいんです。そういう時間をうんとつくといいんじゃないかなと思います。やっぱり、小さいころ、

二人とも兄弟げんかなんかをするときというのはわれわれが忙しいときでね、そうなると山に連れていったりするんですけども、そこに行くときに棒切れを持ちたりして遊ぶんですよ。仲よくなるんですね。人間というのはそういうふうにできているわけだから、仕事に疲れたら、どうぞ山や川にでも行って、子どもをほったらかしでもいいですから、行って、自分はリフレッシュしていくといいんじゃないかなと思いますね。

団員a それに乗って言うと、そういう自然が失われていっているということ自体が、とても人間の身勝手な暮らし方が、地球全体から見ると、本当に絶滅危惧種とかいって、すごい勢いでいろいろな生き物がなくなっている。別のところでは日本人が食べるための食材、それだけをつくっている、日本人が食べ尽くしているような、例えば何だろ、まあ、マグロがすごく値上がりするとかという話もちよっと前にありましたけれども、自然全体の中で人間の役割とか、人間も生きていられるという感性は、やっぱり理屈ではなく、自然の中でいっぱい遊んだ子が自然に身につける感性だと思うんです。それは、多少、そういう体験が少なかったとしたら、大人になつてからでも全然いいので、自然あつてこそなんだというところがわかる大人として生きてほしいし、それが何かで阻害されていくようなときがあったら、そのためには力を出して、自然を守ろうと動けるような、そういう強さも持たないと。癒されるというその意味は、やっぱり、自然というのはそこに命が宿っているからで、それがなくなっていくって、ただ便利なだけになっていったら、人間関係というのはぎすぎすするだろ、身勝手になるでしょう。そういう意味でも、皆さん、道を示す立場でもあるわけだから、本当に大事なことは何かということ、それを言葉でちゃんと伝える大人になってほしいなと思います。

本当に大事なことは子どもが気づかせてくれる

団員 a 大事なことというのは子どもがすごく気づかせてくれるんです、よくよく見ていると。純粹に大事なことで、本当に大事なことをちゃんとと言えるのは子どももだなんて。きのうも家で、ちよつと冗談めいて、彼(座長)が、孫の持っていた刀を取り上げてポンと私の頭をたたいたのね。

団員 c 兄が手づくりで、新聞とかを丸めた上にきれいに布を張ったりして、それは売りたいと思うくらいきれいな剣をつくってくれるんです、子どもたちに。それを子どもから取って、真面目に話しているところをポンとたたいたんです、その眼鏡の老人が。そして、兄の長男なんですけれども、三歳になったばかりの長男が、その剣をじいじから取り返して、じいじの頭をたたいたんです。そしたら、こともあろうに、ここにいるばあばがその孫を叱ったんです。

団員 a 叱ったというか、頭をたたいたらだめよと。

団員 c 頭をたたいたらだめだよと言ったら、そのワタル君という子なんですけれども、「だって、じいじがばあばをたたいたから、ワタル君はじいじをたたいたんだよ」って。大人の側から見れば、大人よりも、確かに結構強くだたたいたんですけれども、そういうことよりも、彼は彼の正義感で動いているし、それは、大人の物差しをすぐに当てはめようとする、そういう一つひとつが本当に突き刺さるというか、「ああ、今はそうだったな」と、本当に子どもには気づかされますし、毎年毎年、違う子を相手にするわけですから、いちいち戻るといのは難しいことだと思っただけでも、時間の許す限り、時間をつくって、子どもの営みをきちんと見つめるということは必要かなと思います。

団員 a ちゃんと理由があるんだよね、子どもがやることには。それを見て酌んであげないと、大人の一律の動きとか、常識を教え込むみたいな、しつけみたいなほうに走ってしまうとその子の言い分が引っ込んでしまつて、それにならされると、本当に大事なときに、もう何も言わない子になってしまうから、そこは大事なところですね。すごくやりのある道を歩み出そうとされていると思うので、自分に自信を持つて、絶対に一〇〇パーセント、うまくなんかいきこないので、多少何かあったり、いろいろ言われてもめげずにね。

自分の考えをきちんと出せる先生に

団員 b 自分の将来にとって、皆さんには大切なことだと思っただけでも、結局、子どもらにとってはもつと大事なことで、皆さんがどういう気持ちで保育をやるのかわからないけれども、いろいろ回っている、「子どもたちにとってはいい迷惑だな、この先生」という人が本当にいるんです、世の中には。本当に広く回ると、「何でこの人、保育をやっているんだろう」と。でもきつと、それはその人がやりたくてそういう態度をとっているのか、その園の方針なのかということは詳しくはわからないけれども、皆さんも多分、現場に入ると、すぐにその別れ道が来ると思っんです。例えば、こういうところに皆さんが就職するのかわからないですけれども、うちは一斉保育をやりますという保育園だったり、子どもの自由さを伸ばしますという保育だったり、そこは本当にすぐに別れ道だと思います。さっき、こういうレールに乗つてと言っていましたけれども、でもそれは全然悪いことではないので、だから、もしこのレールに乗つたのなら、自分で考えて、その中でどれだけ自分の考えを

園の中で出していけるかというか、歯車の一つというよりは、自分が小さなエンジンになって動かしていけるぐらいの気持ちで、それが働くということだと思おうので、歯車になるということではないと思うので。何か、疲れてくると流れ作業になりがちなんだけれども、でも、保育というのは流れ作業では絶対にだめじゃないですか。「三つ子の魂百まで」と言われるぐらいですから、そこで身についたことというのは大きくなるまでその子の価値観に影響するし、子どもたちって、小さい子ってすごく「先生ごっこ」が大好きなんです。先生の口まねとかするので、家にもわかるんですけれども。だから、本当によく先生をコピーしようとしていますから、皆さんは、さつき言っていたように、記憶に残る先生になれるようにというか、だから、多分、流れ作業の一人だったと思われるよりも、変な人と思われてもいいから、自分を出している、自分の考えでやっているんだということが子どもに残ると、のちのち、その子にいい影響があるんじゃないかなと思います。そういうことを言いたかったんですけれども。

団員c 保育園でいろいろと仕事をするので、打ち合わせをすると、若い先生が担当になっていたりすると、来年ぐらいそういう担当になる方がいると思うんですけれども、見ていただければわかるように、僕らは別に業者で保育園に行くわけではないんです。それで、例えばきょうみたいに十時に公演するとしたら、やっぱり三時間ぐらい時間がかるんです。早朝、よく七時からやっていたら、やっぱり七時に行かせてもらいたいです。そういうお話をしていたりすると、「でも園長が八時と言っているからな」というのが多分あると思うんですけれども、「園長に代わります」とか言って、園長先生に何とかしてもらおうとしたりとか、

あと、「八時と言ったら八時でやってもらえないんですか」みたいな。別に僕は水道管を換えに行くわけではないので、僕らには僕らがコンディションをつくって子どもたちとのいい空気感をつくる時間とか、そういう対応というのが必ず必要なんです。

で、子どもたちにこういう作品を見せている人って、もちろん生活するためにお金をいただきますけれども、べつに金もうけ、ポロもうけしなくて来ているんじゃないかって、子どもの将来とか、日本にとっての子どもたちということを考えている団体が、保育園に、「こういう作品をつくったのでぜひ見てください」というお話をしに行っていると思うので、そのところで僕らみたいな団体と信頼関係を築いてほしいんです。「お金で頼んだんだから、そっちでやってください」じゃなく、やっぱり、「何か手伝うことありますか」とか、「もつとよく見せられるために工夫できることはありますか」とか、「こういうふうにしたらいと思うんですけれども、どうですか」とか、外の人にも積極的に対話をしてほしいんです。子どもを商品と思って来ているわけでは絶対にないので、子どもの成長を願って来ているので、そういう外の人とのやりとりというのは十分に気をつけていただきたいなと思うし、園がどうだからとか園長がどうだからではなく、自分で考えて対応してもらいたいなと思います。そういうところは外から見ると一発でわかってしまうので、園の都合はこうだからというの、それはそうだと思うんですけれども、そこは自分で考えていただきたいなと思います。

団員a 公演が終わった後も、子どもたちというのは余韻があるじゃないですか。立ち去りたいような感じとか、お兄さんと話をしたいとか。でも、次は、例えばお歌の時間といたら、いきなりピアノを弾き始め

て、「はい、一緒に歌いましょう」と、パッと。それは大人の都合で、やっぱり余韻を十分にみんなで共有するような、きょう、この子にとつてはすごい出会いだったかもしれないという、そこをちゃんと見てあげられるような。一人ひとりの発達も違うし、影響の出方も、その場が出る子もいれば、一週間、一カ月先にポツと何か言い出す子もいるかもしれないし、そういう、生き物が育っていく、それにずっと寄り添っていく仕事なんだというところを感性豊かに働かせてほしいなと思います。

楽器のこととかも、何かもしあれば、せつかく持つてきているので。

司会 まず、さわらせていただければと思うんですけども。私も幾つか劇団の方に来ていただいていましたが、教員のことをそんなふうにしちんとごらんになっているというのを知って、身につまされるものがあります。

団員C まず、現場を踏んでいらつしやらないから、とりあえず。人気の人にはそこまでできない。本当にここまで出るときもあります。

司会 そうですよ。この後、実際に楽器をちょっとさわらせていただきます。

団員a あと、個別にこっそり質問したかったら。太鼓のある園もあると思いますし、どうぞ自由にしてください。

IV

授業紹介

生活文化概論 70

概論01 はじめに ガイダンス 生活文化の変質と社会的背景	富田 洋三 教授
概論02 生涯発達心理学 生活の中での心の動き	長崎 勤 教授
概論03 生涯発達心理学 ライフサイクル	塚原 拓馬 専任講師
概論04 保育学 保育の現状と課題 ～幼児期にふさわしい生活を創る～	松田 純子 教授
概論05 社会福祉 日常の福祉を考える	秋山 博介 教授
概論06 健康科学 健康と生活	本間 洋子 教授
概論07 教育学 教育と生活文化のかかわり	田中 正浩 教授
概論08 国語教育 生活文化的視座から初等国語科教育の 課題と国語教科書教材・学習材をみつめる	南雲 成二 教授
概論09 音楽教育 「音楽」を楽しむ ～幸せな「音楽文化生活」について考える～	長谷川恭子 助教
概論10 体育学 あなたにとってのスポーツの価値を見つける	井上千枝子 教授
概論11 初等教育学 算数 教育という文化的な営み	渡辺 敏 准教授
概論12 幼児教育 子どもの生活と食	井口 眞美 専任講師
概論13 社会心理学 心の「理(ことわり)」と 社会の仕組みの関連性を考える	水野いずみ 准教授
概論14 家族関係学 社会の変遷と家族の変容	細江 容子 教授
まとめ	富田 洋三 教授

生活文化概論

生活の営みにかかわるさまざまな領域を、十四名の専任教員がそれぞれのテーマに沿って紹介します。

これらの授業を通して、生活文化を概観し、学生の総合的にとらえる力を養っていきます。



概論01

はじめに ガイダンス
生活文化の変質と社会的背景

教授 富田 洋三

一・生活文化学科の誕生と変化の過程

一九九五年四月、実践女子大学に生活文化学科が誕生した。実践女子大学は、一八九九年（明治三十二年）に下田歌子が開設した実践女学校に始まり、間もなく開基一〇〇周年を迎えようとしていた当時、下田歌子ならばこのような学科を創ったであろうという思いを込めて、いわば、一〇〇周年記念学科として生活文化学科が生まれた。下田歌子の信念は、堅実な日常生活をベースにして学問を積み世界に羽ばたけということにある。

下田精神を体した生活文化学科は、生活文化をベースにした生活設計、美的生活、健康・福祉の三領域からマーケットを含む社会に飛び出そうという構想をもとにスタートした。やがて健康・福祉部門は的を絞って「保育士コース」に変わっていった。すでに八〇年代から外で働く既婚女性が増加して、九〇年代には共働き世帯と片働き世帯はほぼ同数になる一方で保育園が不足し、その拡充のために保育士が求められていた。保育士コースの設置はそうした社会的要請に応えたものである。その後保育士コースは、幼稚園と小学校教諭の養成カリキュラムを追加して「幼児保育専攻」となった。

一方、生活設計、美的生活部門はマルチメディアと環境領域を取り入れて「生活文化専攻」となった。そしてそのさらなる成長を図るべく、マルチメディア、環境部門は「現代生活学科」に分離し、代わって心理領域を拡大して「生活文化専攻」は「生活心理専攻」へと衣替えしたものである。

二．生活文化の変容

生活文化を端的に表現すれば、たとえば「国や地域に特徴的な暮らし方」といえるだろう。暮らしを分けてみれば、衣・食・住、それに遊、さらに仕事の領域があるだろう。それぞれの領域で、簡単にいえば次のような変化があったろう。

- 衣文化 和服から洋服へ、仕立てから既製服へ
- 食文化 米食中心から粉食、副菜の増加
内食から中食、外食へ
- 住文化 茶の間、台所からLDKへ
- 遊文化 レジャーの多様化・商品化
- 仕事文化 女性雇用者の増加・男女役割分担から共同へ

三．時代背景

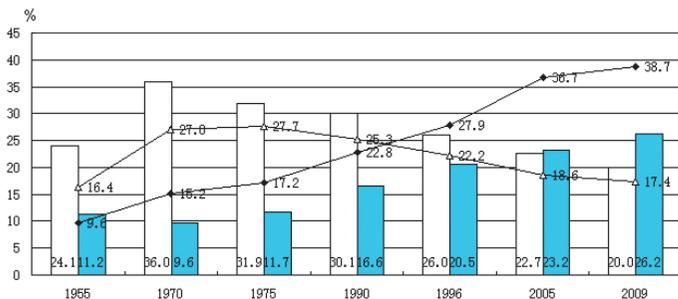
- 一九六〇年代 大衆消費社会・「消費者」の登場
- 一九七三年 專業主婦比率ピーク。通産省に生活産業局設置
キーワード「生活文化の向上」

一九八三年 大蔵省・通産省 ソフトノミクス（サービス経済）を提唱

- 一九八七年 リゾート法（プラザ合意後の内需振興政策）
「消費者」から「生活者」へ
- 一九九三年 五五年体制（工業化時代）の終わり
年功序列賃金、終身雇用制の動揺
- 二〇〇〇年代 共働き世帯が増加し專業主婦世帯との差が広がる
サービス化の進行
- 二〇〇五年 労働力人口ピーク（六八七〇万人）
- 二〇〇八年 総人口ピーク⇨人口減少時代へ

四．男女共同参画時代

欧米の経済先進諸国は、すでに一九七〇年代には工業化からサービス化の時代に入ったが、日本も八〇年代からその傾向が現れ、二〇〇〇年代に入ると製造業よりもサービス業の比率が高くなって、今後さらに上昇すると予想されている。そこに労働力人口の減少が加わるとき、「男は外で働き女は家庭を守る」とする通念は一般性を失い、女性の労働参加は避けられないこととなった。



製造業・サービス業比率の推移
出処 経済企画庁「国民所得統計年報」、内閣府「国民経済計算年報」（各年版）より作成

生活の中の心の動き

いきなりですが、「朝、自分を追い抜いて走ってゆく小学生」を見た幼児は、何を思うのでしょうか？

- 「男の子が速く走っている」……
- でも、これだけではないでしょう。

• 「あのお兄さんは、きつと学校に遅れそうだから、あわてて走っているのだろう」

こんな風に思うのでしょうか？（岡本 二〇〇五より）

Bruner（一九八六）は、人は、その人の行為だけでなく、その人が考えていること、その人の意図について、考える、と、「Landscape of action（行為の風景）からLandscape of consciousness（意識の風景）へ」という発達を提唱しています。幼児期のある時期からくつきりと「意識の風景」が見えるようになるのです。

このような「意識の風景」を見ることは、日常生活の中で様々に起こります。

実践女子大のOBである向田邦子は小説「あ・うん」の中で、地方の転勤から戻った一家が「門倉のおじさん」が用意しておいてくれた貸家に入る。新しい畳に替えていたり、お風呂が沸いていたり、と心づくしの準備に気づく様子を描写しています。

台所ではたみが、米櫃をあけていた。米がいつぱい入り、升が乗っていた。たみは手のひらに米をすくい上げてはこぼしている。…（中略）
 …米をすくい上げてはこぼしているたみの、目の下の盛り上がったところが、いつもよりふくらんでうす赤くなっている。急に笑った

り泣いたり、気持ちがたかぶったとき、母はこういう目になる。門倉のおじさんの心遣いが嬉しいのだから、さと子は思った。

さと子は、この場面で二つの風景を見えています。

「行為の風景」 母（たみ）が米をすくい上げてはこぼしている。

目の下の盛り上がったところが、いつもよりふくらんでうす赤くなっている。

これらから、

「意識の風景」 母は門倉のおじさんの心遣いが嬉しい。

母の考えていることを考えている娘

⇨ 他者の意図を理解するということ

⇨ 「心の理解」

何と「生活の中での心の動き」は豊かで、彩りに溢れているのでしょうか？

このような生活の中での心の動きを見出し、てゆく（⇨読む）のが「生活心理」です。

そして、豊かな「生活の中での心の動き」は、人間が数十万年かけて作り出した豊かな生活の文化⇨食事の支度をしたり、皆で夕飯を食べたり、の中にあるのです。

〔文献〕

Bruner 『可能世界の心理』 田中一彦訳、みすず書房、一九九八年 (Jerome Bruner, *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press, 1986.)

向田邦子 『あ・うん』 文藝春秋社（文春文庫）、二〇〇三年

岡本夏木 『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』 岩波書店（岩波新書）、二〇〇五年



ライフサイクル

人の一生は、どのように発達変化していくのだろうか？

かつて、英国の社会制度で「ゆりかごから墓場まで」をスローガンに社会保障制度が広まったが、個々人の心理・社会的な生活においても生涯を保障することが必要な時代である。生涯発達心理学では、心理と社会との関係により人の精神発達は一生涯を通じて発達変化していくことを説くものである。

現代社会では、医療の進歩により健康への志向が高まり、人の寿命が延びている。日本人の平均寿命は平成二十四年度では男性七九・九四歳、女性八六・四一歳であり、昭和二十五年の男性五九・五七歳、女性六二・九七歳に比べ二〇歳以上も延びていることがわかる。この約二〇年の老年期の特性は、これまでの発達心理学の知見では対応できないため研究も進んできていく。そこで注目されることは、人は一生涯に渡り発達していくという観点である。乳幼児は勿論、青年・成人・老年になっても、人はその人が生きる社会と個人特性との関係により発達・変化していく。そこで、本講座（生活文化概論）では生涯発達を理解する上で必要な、漸成発達と実存発達について講義した。

まず、エリクソンは生涯に渡る人の心理社会的発達を「漸成発達理論」による発達過程で提唱した。これは心理―社会的発達に焦点をあて、心理的課題をどのように解決していくかにより人格の発達のあり方が決まると考えるものである。例えば、乳児期は「基本的信頼 対 不信」であり、この時期は、父親や母親（養育者）との安定的な心理的繋がりを通して、世の中や人に対する信頼を育む時期である。乳児は自分の生存を保障す

る養育者に対して絶対的な安心感を抱けなければ、不信感が深く生まれ、その後の人生も世の中や他者に対する信頼を抱けない状態になる恐れがある。また、青年期においては、「同一性 対 拡散」であり、この時期はアイデンティティ (identity) 「自分が何であるか」を探し求める。この時期は将来に向けて自己を統合することが発達課題となる。このように、人は各発達段階において、心理―社会的発達を経て成熟していく。

しかし、一方で各発達段階における個々人の発達の様相は、個別性を備えているものである。ただ一つの発達段階の尺度では捉えきれない個別性を持ち発達していく。言葉の発達が遅い子どももいれば、身体の発達が早い子どももいるであろう。そのため、ある対象児（者）を理解する際に、発達段階という視点だけにとらわれてしまうと、対象児（者）の個性を見落とす可能性も生じる。

発達段階とは、生活年齢という客観的時間軸に基づいた発達区分である。しかし、人は一人一人が実存的時間軸において生きているのも、また事実であろう。病に伏している時間は辛く長く感じられ、活発に遊んでいる時間は楽しく短く感じられるであろう。このように、人は一日一日を、一時一時を独自に捉えて生きているのである。すなわち、人の一生涯を理解するにあたり必要なことは、発達段階という視点と個別性という視点の相互性である。

生活文化において、「ヒト、モノ、カネ」、そして「レジャー」という時代を過ぎ、再度「ヒト」について、生涯発達の視点から考えみる必要がある時代になっているのかもしれない。それは、また実存に基づいて生涯に渡り発達・変化し続ける「人」であることを忘れてはならない。

保育の現状と課題 〈幼児期にふさわしい生活を創る〉

一. 「保育」とは

子どもが人間として成長するためには、誰かが保育をしなければならぬ。それは大昔から現代まで続く人間の営みである。

日本では、幼稚園創設期（明治時代）から「保育」という言葉が使われてきた。「保育」と「教育」では、何か違いがあるのだろうか。保育所では「保育」が、幼稚園では「教育」が行われると説明されることがあるが、それはどういうことなのだろうか。

「保育」という営みには、二つの側面がある。「保育」の「保」には、「保護・養護」の意味があり、「育」には「育成・教育」の意味が含まれている。乳幼児期の幼い子どもには、特別の保護と配慮が不可欠であり、養護と教育が一体となった「保育」が必要となるのである。そして、子どもが幼ければ幼いほど養護面の配慮がよりいっそう必要であり、また養護的な関わりの中にも教育が含まれている。したがって、乳幼児期の子どもの「保育」には、大人が子どもに対して行う計画的行為だけでなく、自然発生的行為も含まれることになる。

二. 子育てをめぐって

広義の保育として、保護者の立場から、保育は「子育て」と呼ばれる。現在の日本では、子育てをめぐってさまざまな課題が顕在化している。

急速な少子化の進行の背景には、結婚・出産・子育ての希望がかなわない現状がある。子ども・子育て支援の質的・量的な不足があり、子育て中の親は、ますます孤立感と負担感を募らせている。都市部の待機児童問題は未だ解消されておらず、放課後児童クラブの不足（「小一の壁」）も

深刻な問題である。地域の実情に応じた対策の不十分さが指摘される。また、保育の質の保障は、子どもにとつて最も重要な問題と言わねばならない。

三. 保育現場をめぐって

保育所や幼稚園などの集団保育の場が直面している多くの課題のうち、ここでは二つの重要な課題を取り上げる。

一つめは、基本的な生活習慣形成の難しさである。従来、生活習慣の形成は、家庭や地域で継承されてきた。生活習慣に関する考え方は、地域・文化により異なり、時代とともに変化する。多様化・複雑化する現代社会の中では、人々が共通した価値観・信念・理念を有することはいっそう困難である。多様な生活様式が存在し、規範・しつけの指針も曖昧になっている。そのような中で、幼児期の発達課題として重要な基本的な生活習慣の形成は、集団保育の場に任せられ、保護者に代わって保育者が担う役割が増大している。二つめは、子どもの遊びの変容である。現代の日本では、地域の遊び場や子ども集団が減少している。一方で、豊富な玩具類が市販され、電子メディアの普及も著しい。屋外での伝承的な遊び（大人数）は姿を消し、屋内での商品化された玩具を使った遊び（少人数）が多く見られるようになった。友だちと思う存分に身体を使って、自分たちで考えて、自由に遊ぶことが難しくなっている。

四. 保育の課題

平成二十七年には、子ども・子育て支援新制度がスタートする。社会全体で子どもの最善の利益（幼児期にふさわしい生活）を保障しなければならぬ。そのためには、保育者の専門性の認識と評価、子どもを育む生活・コミュニティの創造、遊びのための時間・空間の保障、子育て支援の充実、保育条件の改善などが喫緊の課題である。

生活文化演習の社会福祉領域を担当する。この分野は対象領域が広く、社会学・教育学・心理学とその周辺を学習することによって、より深く福祉が理解できる。

福祉の一般的な印象として、「お年寄り」「お金がかかる」「ボランティア」「汚い」などが挙がる。

つまりマイナスの印象が強い傾向にあるといえる。

しかしながら、現在の福祉には「在宅化と自律・自立のグループホーム」が求められている。以前の古い施設で行われていた施設主義のような閉鎖型施設は全くない。

福祉のあり方を平準化するといった流れから出現したノーマライゼーションの考え方が、地域に根付き始めている。

障がい者や高齢者など社会的に不利益が加わる可能性のある弱者が、社会の中で一般の人たちと同じように暮らし活動できるように、偏見のない関わりの可能性を創る。

また、弱者がスムーズに社会参加できるような環境の創造をめざす活動・運動が大切である。

ノーマライゼーションの中で考えていくことは「人間の幸福を追求することと日常の安寧である」。なぜノーマライゼーションが全ての人にいきわたらないのかを考える。

そして人間関係を構築するのに大切な相互関係を学習する。

厳しい現代社会を生き抜くには、まず自分でできることから始めて

現状を判断することが大切である。

ソーシャルワークの福祉技術として「自己覚知」があるが、この方法は、例えば人間関係の中で「好きか・嫌いか」というような自分の特性や価値観、嫌いなタイプがなぜできるのか、自分の言動にどのような特徴があるか、などについてグループを作って議論する（相互交流を進める）。

そして、発達段階と発達課題にどのような影響が出現するのかを考える。いろいろな視点から生活福祉問題を捉えて、どんな生活支援が重要であるか考える。

人間が元々持っている潜在的な力を発見し、生活に生かし、今の不利な状態から自律・自立する力を身に付けられるような関わりが必要である。

その方法を専門家、保育士や関連領域の人材が連携を深めて協働し、問題解決に向けていくことが重要である。

生活文化を人の生活のありようにとらえたとき、人の生活、生き方は変容しかつ多様ではあるが、その基本となるのは健康である。一九五一年に本邦で紹介されたWHO憲章では、「健康とは、完全な肉体的、精神的および社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と定義している。飯田は、身体面だけではなく精神的にも社会的にも良好な状態であり、社会的にも良好な状態とは、周りの人々や社会との関係において孤立や過度の矛盾や対立がなく、居場所と役割とサポートが得られ、しかもその役割を満足に果たしている状態と定義している。身体の健康を考えたとき、「健康」の概念そのものに変化はないものの、医学・医療の進歩、社会インフラの整備、食生活の変化は、疾病構造を変化させ、死亡原因を変化させ、日本人の寿命を大きく延伸させた。そしてそれらを通して、生活習慣が健康維持に大きく関与していることを明らかにしてきた。健康維持・増進は、病気に対して治療を行う医療すなわち専門家による管理から、個人が主体性を持って自分で管理することが求められるようになってきた。また、病気の治療に際しても、専門家と共に患者が主体的に取り組み医療、自分で選択する医療へと変化を遂げてきた。また、社会環境の変化、特にICTの進歩は、メディアによる医学、医療、健康に関する玉石混淆の情報の氾濫をもたらした。これらの情報を選別し自分のものとして、豊かで健康な生活を送ることに資することもまた、個々に求められてきている。

このように、現代社会の個人の健康は、主体性を持って自身が管理していくことととらえられるが、そのためには、科学的見地からみた健康

の理解、現代の社会が健康に関してかかえている構造的な問題を理解・認識することが必要と考えられる。生活心理専攻に健康領域が柱の一つとして設けられたのは、このような背景があつてのことである。それを踏まえて、まずその基礎として、一年次には「人の体の構造とその機能」を学び、自分の体が六〇兆個の細胞から構成され、その細胞がそれぞれ生命維持に必要な代謝を行っていること、それぞれの器官の働きなどを知る。「健康科学概論」では、健康に影響する様々な要因とその影響に関して科学的データに基づいて考え、生活習慣が健康にとっていかに重要であるかを認識する。さらに、女性の活躍が期待されている現代の日本において、健康科学論a「女性の体と心」では、自身の健康と家族の健康、キャリアプランとワークライフバランスなど、女性が直面する課題を取り上げる。さらに、変化する社会にあつて、子どもの健全な成長・発達を保障するために家庭は何をなすべきか、社会は何をなすべきかを考えることも、大きな柱として学ぶ。また、健康・医療に関する様々な課題を公衆衛生的な視点から考える健康科学論b（疫学からみる健康）では、精神衛生に関する課題を広く取り上げる。そして現代医学・医療が直面している、人の生命の始まりをどのように考えるか、不妊治療と親子関係、脳死と移植医療、死をどのように考えるかなど生命倫理的課題、高齢化と医療、感染症のグローバル化、ICT社会への急激な変化がもたらした健康への影響など、健康科学論（現代医療の課題）では、医療の進歩、社会の変化がもたらした様々な今日的課題を広く取り上げて考える。

生活文化概論の分担時限では、喫煙を取り上げ、その健康への影響、evidenceに基づいた科学的見方、社会の喫煙に対する見方の変遷などについて講義を行った。

教育と生活文化のかかわり

教育は、「生活文化」が意味する「人の生活のありよう」に影響を与え、形作る文化的事象のひとつである。一方、社会生活や生活文化には人間の成長・発達を促し、形成する機能がある。教育学は、自然的存在の「ヒト」が理想的存在としての「人」になる過程での、教育と生活文化の不可分さ（教育の社会的機能、社会の教育的機能など）を追究する学問でもある。このように「生活文化概論」の「コマを「教育学」が受け持つ（教育学からアプローチする）意味を冒頭で伝えることから始めた。

まず学校生活や学校文化について考えてみた。学校では、授業で教えられる教科の知識とは異なり、知らず知らずのうちに教えられる決まりや知識がある。チャイムの前に着席し、準備をする。私語を我慢し、教師の話聞く等々。子どもは学校生活に適応する過程で様々な価値、態度、社会規範などを暗黙裡に学びとっていく。これを「隠れたカリキュラム」と呼ぶ。身に覚えのある学生は、多くを例示してくれた。続いて、学校生活とそこで形成される学校文化の影響力について、『なぜ少女は走ったか』長田勇ほか著、川島書店、一九九二）を資料に解説した。その内容は、小五の女子生徒が宿題を忘れ、「忘れ物をしたら校庭を走る」という決まりにより、校庭を一周半罰則マラソンしている最中に急性心不全で亡くなるというものである。少女は、過去に心臓手術を受けており、体育は授業内容によって見学となっていた。この痛ましい出来事が報道され、その批判は教師、学校、そして体罰に向けられた。しかし、目を向けるべきは、過度な運動が死に直結するのになぜ少女は自ら走ったのかということである。学校文化がいつのまにか、一少女の中に走らなくてはならないという脅迫

的な観念を形成したのではないかと分析している。事例に驚きながらも似たような感覚に囚われた経験を書いた学生、また、このような学校文化の分析的解釈に新たな視点を得られたことを記した学生が多くいた。

最後に、先人たちの「教育」に関する定義から、教育と生活文化のかわりについて考えた。スイスの教育者ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi) は、決定的な人間形成力を備えた環境として家庭を捉え、「生活が陶冶する」と言っている。ドイツの教育学者ディルタイ (Wilhelm Dilthey) は、家庭を含めた社会集団にまで生活の場を拡大し、「生活そのものが人間を形成する」とした。アメリカの教育学者デューイ (John Dewey) は、「社会の生命はその存続のために教えたり学んだりすることを必要とするばかりでなく、共に生活するという過程そのものが教育を行うのである」と、社会生活が人間をつくり、社会集団における精神や文化が社会の構成員一人ひとりに受け継がれていくことで社会が存続するとした。これらは人間の成長・発達において、社会生活や生活文化が重要な役割を果たすことを示している。しかし、留意しなくてはならないのは、人間の成長・発達を促す機能を備えた生活そのものは、教育を第一義的な目的としていないということである。時として機能した結果が副次的で周辺的になることもあり、それは成長・発達を助成するような望ましい作用となることもあれば、逆に妨げ、歪めるような作用となることを意味する。生活に備わる人間形成力は恒常的で、その力の及ぶ範囲は広く強いが、一方で、その力は自然性を特徴とするため、人間を望ましい姿へと導くという教育の本質からすれば十分とは言えない。であるからこそ意識的・意図的な形成作用としての教育が必要となることを教育学の一理論として確認し、授業を終えた。

生活文化的視座から初等国語科教育の課題と国語教科書教材・学習材をみつめる

第八回用ワークシートから、【授業概要】を報告しておきたい。

【南雲の担当は、初等教育（七歳～十二歳児）＝小学校義務教育課程の子どもたちの「ことばの発達と学習」「ことばの教育と学習づくり」についてです。皆さんが小学校を卒業してから六年が経ちます。言語教育教材・学習材＝文化材としての「国語の教科書一年～六年」を取り上げ、生活文化的視座から「国語科教育」をみる（見る・観る・看る・診る…）ことにチャレンジしていきます。

子ども（幼児・児童）とことば（コトバ・言葉）の関係、子どもの生活とことばの学習（話し言葉＝音声言語、書き言葉＝文字言語）を次の四観点からみつめます。①話すこと・聞くこと（話すこと・聞くこと／話し合うこと）②書くこと（鑑賞／詩歌・物語の創作／批評等）（説明／記録／意見等）（案内／報告／手紙／編集等）③読むこと（文学的な文章／説明的な文章）④伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（文字や文法の学習含む）

例えば次の学習単元は、①～④のどこに該当するのでしょうか？ ☆
 じどう車くらべ☆どうぶつの赤ちゃん☆たんぼのちえ☆ありの行列☆
 すがたをかえる大豆☆かるた☆アップとルーズで考える☆ウナギのなぞ
 を追って☆生き物は円柱形☆新聞を読もう☆天気予測する☆生き物は
 つながりの中に☆『鳥獣戯画』を読む……】

【次に、基本的な問いに真剣に取り組みます。（１）あなたにとって生活とは、生活文化とは何ですか？（２）言語生活と学習生活、暮らしとことば（コトバ・言葉）、子どもたちの国語学習を考える。（その１）「小学校国語科学習」の思い出は何ですか？（その２）話すこと、聞くこと（音

声言語）、書くこと、読むこと（文字言語）で、あなたが心がけていることは何ですか？】

講義に協働参画してくれた学生諸氏のポートフォリオから、何例かを引用・紹介させてもらうことを通して授業報告としたい。

A 「生活」とは ◇今生きている自分の生物的な要素より少し遠くあるもののような気がします。「食べる」というより「料理する」「働く」「物を買う」「見る」というより「読む・鑑賞する」など。◇衣食住やそれにまつわる事象のこと。アルバイトをしてお金を稼ぐこと、大学の授業に真剣に参加して様々な事柄を経験する等。

B 「文化」とは ◇先に生きた人々が造りあげたもの、また私たちが創りあげていくものだと思います。国などの地域でも違ってくるものだと思います。基本的人権には「文化的な生活を営む権利」が保証されているので、やはり「生活」とは差別化されているものだと思います。◇生活や私を人間として教養ある価値を持つ者へと導いてくれるもの。生活は衣食住は勿論、文化に基づいて成立している。

C 「小学校国語科学習」の思い出 ◇月並みだが、朗読が楽しかったです。低学年の頃は音読カードというのがあったのですが、皆の前で披露するのが好きだったので、家ではサボリ気味だったように思います。高学年の時、椋鳩十さんの『大造じいさんとガン』の学習で、初発の感想文に「大造じいさんは、ガン（残雪）に惚れている」と書いたクラスメイトがいて、その表現に感動し、誰が書いた感想なのだろうとドキドキしたことが印象に残っています。

D 「言語生活」で心がけていること ◇語頭と語尾をしつかりと発音すること。話しことばのスピードを加減すること。相手の耳・目・心を意識して話すこと。音読朗読が好きなので、声に出して読むこと。正しい姿勢で文字・文章を書くこと。お気に入りの言葉、意味を知らなかった言葉など丁寧に確認し、自分の語彙を増やすこと。

「音楽」を楽しむ ～幸せな「音楽文化生活」について考える～

私たちの生活の中で、最も馴染みのある音楽活動は「鑑賞」である。鑑賞とは、表現を感受し、楽しみ、理解し、味わったうえで、自己の中で評価することである。西島千尋^注は、音楽活動について「聴く音楽」「演奏する音楽」「参加する音楽」があると述べている。本講義では、このカテゴリーがどのようなものか体験をし、幸せな音楽文化生活とはどのようなものか考えた。

まず、筆者演奏によるリスト作曲『コンソレーション』（慰め）第三番の鑑賞をした。この楽曲はリストが恋人と出会った後に作曲されたものなので、精神的に満ち足りた幸福感が表現されていると解釈し演奏した。学生には、作曲家や楽曲のタイトル、作曲された時代の背景や楽曲の解説などの情報を与えずに、どのような印象を持つかを考えながら鑑賞させた。多くの学生から、「癒し」「幸せ」「ゆったり」「眠くなる」などの印象を持ったという言葉が聞かれた。ほとんどが、演奏者（筆者）が意図して表現した要素である。このことから、情報がない中、意識的に表現を受け取ろうとすることで、能動的な要素をもつ鑑賞活動が行われたということが出来る。次に、モーツァルト作曲の歌劇『魔笛』より「夜の女王の Aria」を鑑賞した。今度は前もって楽曲の情報を与え、それをふまえて聴き味わったため、より積極的に音楽の表現を感受する活動にすることができた。

鑑賞活動では、ただ聴くだけでなく、鑑賞する演奏表現に聴衆が参加していく形態もある。ロックバンドのライブなどで、聴衆が音楽に合わせて一斉にタオルを振る、などは学生にとって馴染みの深い例である。

う。クラシック音楽の中にも、聴衆が演奏に参加する例は存在する。ウィーンフィル管弦楽団のニューイヤークンサートで必ず演奏されるヨハン・シュトラウス一世作曲『ラデツキー行進曲』は、その例のひとつである。聴衆はただ演奏を聴くだけでなく、指揮者に指示されるように演奏に合わせて手拍子をすることで、より楽しい気分を味わうことができる。

私たちの生活の中で、鑑賞は聞き流すような受動的な活動が多い。しかし、これらのように、鑑賞は能動的な要素を増やしていくことで、「聴く音楽」に留まらず「参加する音楽」にもなる活動なのである。

また、リリ・フリーデマンが提案する『雨の風景』という即興合奏の活動を行った。この活動のポイントは、周囲の音をよく聴きながら、その中で自分がどのような表現をして音楽を作りあげるかを考えることである。この経験を生かし、実践女子大学の校歌を、学祖下田歌子が歌詞に託した想いを理解して受け止めながら歌唱する活動を行った。これらの活動は、「演奏する音楽」だけでなく、「参加する音楽」ともいえるものである。

このように、「聴く音楽」は、楽曲が表現するものを意識したり、他者との関わりが生まれることで、より充実した音楽活動になった。他者と聴き味わう・音楽に参加する・演奏することは、「鑑賞」や「演奏」で得た気分や評価を分かち合うことになり、さらに「音楽」の喜びが大きなものとなる。そのような音楽文化を余暇において体験することが、幸せな音楽文化生活だと考える。

〔注〕

西島千尋「クラシック音楽は、なぜ鑑賞されるのか 近代日本と西洋芸術の受容」新曜社、二〇一〇年

あなたにとってのスポーツの価値を見つける

授業目標

体育・スポーツは、歴史的に過去から現在にかけても、人間にとって意味あるものとして概念化され、実践されてきているものであるが、それは、それぞれの時代において、その社会的、文化的、学問的および科学的思想の背景において概念化されてきたといえる。そして、現代は、社会的背景および人間の生活や人生の視点に重点を置いた、身体運動の大切さを概念として、人間の身体運動がその種々な状態において実践する個人の福祉のために貢献するような活動（個人を中心におく考え方）として組織的に運営されるようになってきている。

一九六四年東京オリンピック大会が開催され、その後五〇年が経ち、この間に社会情勢は大きく変化し、スポーツを取り巻く環境も変わっている。急速に進む高齢化により、健康のための運動・スポーツの重要性が広く認識されるようになった。一方、指摘されて久しい子どもの体力低下の問題も、依然として解消されていない深刻な問題となっている。そして、二〇二〇年、東京でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることになり、競技スポーツの世界も大きく動いていくものと思われる。

また、競技スポーツの振興とともにスポーツ関連産業も活発に動き始めている。スポーツは社会をそして産業を動かし、スポーツによって社会が変わり、人の生活も変わる。スポーツは人的資源の育成と活用を生み出す。こうしたスポーツ産業の活発化の動きは、学生にとって最も近い将来の探求テーマである就職活動における職種選択の機会に良好な影

響を及ぼすことになる。

スポーツは、私たちの生活さらにはライフステージと深い関わりがある。そのスポーツの力で何ができるのか、スポーツを行う一人ひとりがそれぞれのスポーツの価値を見出し、個々の生活を豊かにするためにスポーツをどう捉えるべきかについて考える。

また、生活文化学科の学習と「体育学」（運動・スポーツ関連研究領域のテーマ）との関わりについて理解することによって、広義には「生活文化とスポーツ文化」との関連について把握することをねらいとした授業内容で構成した。

授業内容

- 一、「体育学」の研究領域と生活文化学科での学びとの関連
 - 二、健康生活について（生活とは／生活時間と余暇活動）
 - 三、私たちの健康はどのように守られているか（健康とウェルネス）
 - 四、人の生涯とスポーツ（生涯スポーツの考え方／ライフステージとスポーツライフと健康生活との関わり）
 - 五、日本の「スポーツ振興」の動向（高齢化社会と健康／子どものスポーツ／スポーツ環境づくりとスポーツ振興）
 - 六、スポーツの産業化（スポーツ開発による人的資源／スポーツ事業企業／スポーツイベント・スポーツ・ツーリズム／スポーツ指導者と資格制度）
- スポーツの産業化を通じた開発の具体的な事業内容は、国内外を問わず、スポーツへの参加による生活の質や心身の健康の維持、向上、他者とのコミュニケーションの促進といった個人的な役割を超えて、地域さらには各国間のコミュニティの形成など、社会全体や人間そのものの幸福を追求する役割が期待されているといえよう。

図1はアメリカの幼稚園での朝のサークルタイムの風景である。先生は子どもたちと「間」という言葉の意味を話し合っている。アメリカでは子どもたちの聞く、話す態度を幼稚園から大切に育てている。



図1 サークルタイム

図2は日本の小学校での授業参観の様子である。前を向き先生の話をよく聞くことが日本では大切にされてきた。このように国が変われば教育の形もずいぶん違う。これは教育がその国の人々の中で脈々と受け継がれてきた文化的な営みだからといえるであろう。



図2 授業参観

教師の研修においても日本は独自の文化を継承してきた。「授業研究」はその文化の一つである。一つの授業について指導案(レッスンプラン)を作り、事前検討をし、実際の授業を仲間の教師が参観する。授業後は授業での教師の指導や教材のありかた、子どもたちの学ぶ様子などが話し合われる。このような一連の活動は日本独自のものであった。この活動が『日本の算数・数学教育に学べ(ティーチング・ギャップ)』(図3) という本で紹介され注目されるようになった。この本では日本、ドイツ、アメリカの算数・数学の授業風景を録画し、その内容を比較分析し



図3 「日本の算数・数学教育に学べ」表紙

ている。授業の内容を数学的に「高・中・低」とみた時に、日本はこの三つが「三九%、五一%、一〇%」となっている。ドイツ「二八%、三八%、三四%」、アメリカ「〇%、一二%、八九%」であった。このように日本の算数・数学の授業の中で数学的にみて十分な内容が扱われている背景に「授業研究」があることも明らかにされている。一時間の授業の中で一つの問題について自分で考える時間、集団で話し合う時間を設け、子どもたちの理解を深めようとする取り組みは、日本の算数・数学教育が長年積み重ねてきた文化的な側面といえるであろう(図4)。日本の教育の文化である授業研究はアメリカ、アフリカ、アジアなど現在では様々な国で少しずつ形を変え取り入れられている。



図4 授業研究風景

日本では長年にわたり、算数・数学教育、また理科教育は世界的にみてもトップレベルであるという自負があった。しかし近年のPISAの調査結果から、計算問題等の問題は得意であるが、様々な事象の知識を関連づけて解く問題や、文章で説明することが苦手であるという結果が報告された。このような結果を受け、算数・数学教育では「思考力」「表現力」「判断力」の育成を目標に掲げ、これまでの「授業研究」を継承しつつ、新たな指導方法の研究が積み重ねられている。近年は、算数・数学教育で育てるキーコンピテンシーを明らかにし、子どもに確かな学力を身につけさせるための研究を、これまでの日本の文化である授業研究に「授業デザイン」や「社会構成主義」といった観点を新たに加えながら進められている。日本で育つた「授業研究」は世界で活躍する日本人を育てる観点からも発展し続けなくてはならない。

子どもの生活と食

ここでは、子どもの世界からみた食について知り、子どもが食を樂しむ健康的な生活を送ることの大切さを感じてほしい。

一、食や健康に関する現代的課題

子どもの生活習慣が確立していない、食生活が乱れている等の現状を踏まえ、平成十七年には食育基本法が制定され、食の重要性が再認識された。しかし、四年前の震災により放射能汚染という新たな食の問題が起こり、保育現場では大きな混乱が生じた。都内のある保育園では、未だ栽培した野菜を食わずに鑑賞するのみである。震災後しばらくは、給食を断りお弁当を持参する家庭も見られた。

二、大人が果たすべき役割

食に関しては、大人が内容も量も決めて子どもに与える。子どもが極めて受け身になる場面だけに、大人が果たすべき役割は大きい。

【小学校二年生が書いた作文】お母さんが作ってくれたカレーライス

お母さんが三〜五時間も煮込んでくれます。

今でも一口食べると食べることに集中してしまいます。

どれほどおいしいのだろうかと思わず微笑んでしまう。作文から「作ってくれる姿が見えること」という食育のキーワードが見えてくる。

【五歳児へのアンケート結果】好きなお弁当、苦手な食べ物

(好き)カレーライス、肉まん、卵焼き、焼きそば、たこ焼き

(苦手)トマト、ニンジン、ブロッコリー、ピーマン、ナス

食事はあくまで楽しい場でありたいが、早い時期に、苦手な食材を少しでも食べてみる経験をも必要である。

三、保育園や幼稚園の実践事例

ある保育園では、バイキング形式の夏野菜パーティーを行っている。五歳児は、食事前に栄養士さんから夏野菜に関する栄養指導を受ける。また、保育園で育てているピーマンやナスの絵を描いたり、トウモロコシの皮をむく手伝いをしたりして、食への関心を高めていく。

【夏野菜パーティーで大切にしていること】

友だちとみんなで楽しく食べる／野菜が苦手な子どもでも食が進む雰囲気がある／栄養士、調理師等、食に関わる大人の顔が見える／食材の栽培を行ったり、調理に参加したりする

【家庭との連携】

夏野菜パーティーは、子どもが夏野菜に触れるきっかけでしかない。各家庭で、子どもと野菜を買いに行ったり、調理法を工夫して食べやすくしたりする必要がある。

【幼稚園や保育園における配慮】

アレルギー児への対応は、アレルギー物質を除去するだけでなく、家庭と連携を図り見た目が似たものを用意し、周りとの違和感を極力減らす／自立した生活を目指し、当番活動を取り入れたり、ご飯と汁物の配膳、箸の向き、食べ方等、望ましいマナーを伝えたりする／食を樂しむだけでなく、ままごと、お店やさんごっこ、芋の栽培 調理といった食で楽しむ場を設ける。

このように幼稚園や保育園では、家庭と連携を図りながら、子どもを取り巻く生活全体の中で食を考え、子どもの「生きる力」を育んでいく。

心の「理(ことわり)」と社会の仕組みの関連性を考える

私たちは、社会のなかで生き、私たちの「心」は、社会を形作り、社会から影響を受けている。担当回では、こうした社会心理学の視点に基づき、心の「理(ことわり)」と社会の仕組みの関連性を考えていくことについて、講義した。

私たちは、様々な「社会(集団)」に所属している。その社会(集団)は、家族・友人、保育所・幼稚園、小・中・高等学校、大学、地域コミュニティ、会社、日本、そして国境を越えた関係など、多岐にわたり、また、ひろがりを持っている。こうした多岐性・ひろがり、現在、情報通信・移動手段等の急速な変化に伴い、さらなる発展を見せ、世界中に存在する様々な社会(集団)との接触・交流やその継続を可能にしている。たとえば、筆者は、インドネシアの中核都市スマラン(名古屋程度の規模の都市)在住のインドネシア人家族と日頃、facebookを通じて、国境を越えたやりとりを行っている。また、二〇一一年二月に彼ら一家を訪問した際、もっとも利便性の高い移動手段は、近年拡大が著しいLCC(Low Cost Carrier ローコストキャリアー格安航空会社)路線であった。筆者は、LCC路線でスマランを訪れ、直接彼らと出会い、インドネシアの家族関係について考察した。このような情報通信・移動手段の変化に伴って、これまでは接触・交流やその継続がそれほど容易でなかったと思われる社会(集団)とも、直接的・間接的なやりとりを行えるようになってきている。

したがって、たとえば異なる国や文化圏に暮らす『家族』集団について、相互に影響を及ぼしやすくなっているといえる。そのため、今日の社会に生きる私たちは、『家族』など、ある社会(集団)について、国外や異

なる文化圏も視野に入れながら捉え、固定的でない『家族』イメージを持ちやすい心理的様相にあるといえるだろう。また、相互に影響を及ぼしあう中で、私たちの『家族』イメージが心理的に変化し、それに伴って社会のあり方やその仕組みが徐々に変化していくことで、新たな社会が形作られることもあり得るだろう。さらに、私たちの「心」は、これら変化した社会のあり方やその仕組みに影響を受けて、また変化していく。以上の例に見られるように、社会の中で生きる私たちの「心」は、社会から影響を受け、社会を形作り、そしてまた、社会から影響を受けるのである。

こうした私たちの「心」と社会の関連性を捉えていく上で有用なモデルの一つとして、ブロンフェンブレンナーの生態学的モデル(ecological model)を講義で提示した(図)。このモデルに基づいて、私たちが所属する様々な社会集団とそれらの関係について考えると、私たちの「心」と社会の関連性について、把握しやすくなると思われる。

学生のみなさんには、社会心理学を学ぶ中で、心の「理(ことわり)」＝仕組みと社会の「仕組み」の関連性について探求し、暮らしやすい社会にしていくにはどのようなことが必要なのか、そのために私たちはなにをする必要があるのかを考えることを願っている。

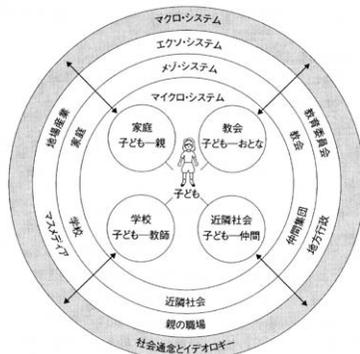


図 ブロンフェンブレンナーの生態学的モデル(ecological model)
 (高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子(編)(2012)
 『発達科学入門1 理論と方法』(東京大学出版会)より転載)

社会の変遷と家族の変容

本論のテーマである「社会の変遷と家族の変容」について、特に今回は「家事と主婦の誕生」という視点から考えてみたい。

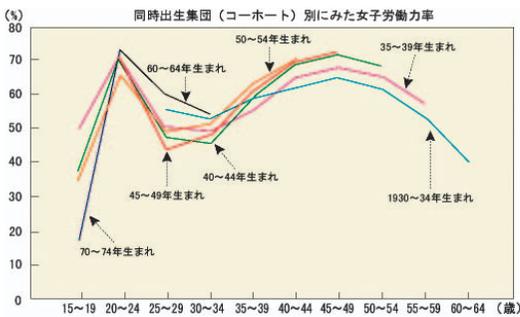
落合恵美子は、主婦はいつごろから存在したのかという問題を『二十世紀家族へ』（有斐閣 一九九四）で検討している。この検討に際して、主婦とは何かという問題を確認しておく必要がある。すなわち、「主婦」とは、経済的に夫に依存しており、家庭内の家事にもっぱら従事する妻のことをさすと捉えられている。この定義から考えると、さらに「家事」とは何かという問題を考える必要がある。Ann Oakleyは『主婦の誕生』（三省堂 一九八六）で、家事を、①もっぱら女に割り振られ、②経済的な依存、③労働として認知されていない、④女にとって、それが主たる役割である と捉えている。

家事や主婦の問題を考えると、我々の住む社会において「市場」が生まれ、「資本主義」がでるまで、家事や主婦が存在していなかったという捉え方が可能となる。すなわち、家事や主婦の誕生には、産業革命によって近代化が達成され、家庭外労働と家庭内労働が生み出される必要がある。それは、家庭外での生産労働がもたら男性に振り分けられ、家庭内での家事労働がもたら女性に振り分けられることにより誕生したと捉えられる。近代以前の農耕社会では、男女を問わず家族は生きるために生産労働に従事し、男も女も様々な労働を分担し、先ほどの定義に基づく「主婦」の存在はありえなかったといえる。

さらに「労働」か「家事」か、という区別は、支払われる労働かどうかによっ

てはじめて成立する。同じカテゴリーでも、料理人がレストランの厨房で作る場合と、主婦が家庭の台所で作る場合と異なる。主婦が料理人と同じ技術を持っていたとしても、それが家庭の中で行われ支払われない労働である限り、「家事」とされる。市場労働が成立するまでは、「家事」は成立しえず、「主婦」も存在しなかったのである。だから、資本主義的市場が社会を広範に覆うといった社会の変遷が、「主婦」の誕生という家族の変容と関わることとなるのである。

主婦の誕生は、日本において、工場やオフィスで働くサラリーマンが大量に生まれるのと同時期、すなわち大正期（一九二〇年代）であるとされる。このサラリーマンの一部が、経済的に夫に依存し、家庭内の家事にもっぱら従事する主婦を可能にし、さらに、一九六〇年代から主婦が大衆化していくとされる。女性の労働力率を年齢別に見ると、日本では二十代前半で高く、二十代後半から三十代前半で低くなり、その後ふたたび上昇する「M字型」を示す。このM字の低い「谷」がもっとも低くなっているのは一九七五年ぐらいであり、出生コホートという一九四五〜四九年生まれの世代である。この時期この世代において、日本では、女性がもっとも「主婦化」したのである。それまで働いていた女性が、「主婦」となり、その後この「主婦化」傾向は減少することになる。



M字型曲線の谷がもっとも深い団塊の世代の女性
資料 経済企画庁「平成7年度国民生活白書」より引用

我々は、「あたりまえ」の世界に安住せず「なぜ？」という問いを発し、慣れ親しんだものの見方をいつとき封印して、異なる視点からものごとを見つめてみることに、いろいろなことが見えてくるのである。

〔参考文献〕

- アン・オークレー『主婦の誕生』岡菜花訳、二香堂、一九八六年 (Ann Oakley, *Housewife*, Allen Lane, 1974)
- 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、一九九四年
- 上野千鶴子『家長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、一九九〇年
- 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、一九八九年
- 落合恵美子『二十一世紀家族へ』有斐閣、一九九四年
- 落合恵美子『近代家族をめぐる言説』岩波講座 現代社会学』一九卷、岩波書店、一九九六年
- 落合恵美子『二十一世紀家族へ』新版——家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣、一九九七年

生活文化概論の授業では、十四人の専任教員が各自の専門領域と「生活文化」のかかわりについて述べてきた。これは、今後、心理、保育を中心として広い領域にわたって学習していく学生の道案内になるべく役割を持つことを期待して開設された講義科目である。それだけに、あるいはそれ故に「まとめ」というのは難しいが、働く女性が増えることによって暮らし方も変わってくる、すなわち生活文化が変わり、マーケットも変わっていくということについて話すことにしよう。

近年のデフレは価格競争を呼び、労働環境の悪化による過労死やうつ病が大きな社会問題となっている。だがこれは、すでに一九八〇年代末には社会問題化したものである。仕事に駆り立てられて力尽き倒れる人たちは、まるで用が済んだらうち捨てられる「馬車馬・城大工」ではないかといわれるようになった。一方、「外で働く夫と家庭を守る妻」という男女役割分担の色合いが強かった当時、妻は休日の夫を「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」といい、夫は平日の妻を「三食昼寝付き」と揶揄して流行語となった。こうした言葉は、物質的豊かさをもたらした一つの結果を象徴するものであり、また暮らしにおける男女役割分担の再考を促す言葉でもあった。

それから四半世紀を経たいま、過労死やうつ病問題は解決されるどころかささらに拡大している。猛烈な生産・販売競争が激烈な価格競争に変わっただけで、形は変わっても劣悪な労働環境が随所にあることに変わりはない。その一方で働く女性が増えてきた。日本の生活文化の根底にあった男女役割分担の垣根を崩して互いの分担をシェアするなら、平均

的に（市場）労働時間は減少する。そして自分と家族のための（家庭労働とレジャー）時間が増える。一般に労働とは、商品の生産行為であり金銭の対価を伴う。それに対して家事や育児のような家庭労働が作り出すのは、値段のついた商品ではなく値段のつかない贈り物（ギフト）である。市場で生産したものは不特定多数の第三者に販売される商品であり、家庭で生産したものは家族と自分、あるいは親しい人へのギフトである。

人の暮らしには商品経済とギフト経済が含まれるが、これまで問題にされてきたのはもっぱら商品経済であり、その象徴が「GDPの成長」である。それは、人間はお金を使って買い物をする消費者であることみなすもので、お金と商品は生活に不可欠ではあるがすべてではないとする生活者としてみるものではない。

四月の最初の授業で話したように、消費者（の満足）よりも生活者（の満足）が重要だといわれるようになったのは八〇年代末のことであった。ここでは「ものの豊かさよりも心の豊かさ」が求められ、そのために必要な第一は「労働時間の短縮」であった。しかしながら経済が停滞ないし後退し、所得も上がることのなかったこの四半世紀の間、「暮らし＝お金」の図式が復活した。平均的に労働時間は短くなったが、それは非正規の短時間労働が増えた結果に過ぎない。

働く女性が増える一方で、男性の家事・育児時間は増えない。それは男性が家事・育児に非協力的というより、その時間がないという方が正解である。必要なことは、男性ばかりでなく、一般にフルタイムで働く人の労働時間を減らすことである。利用できる時間はすべての人に平

等に二十四時間。それを市場労働と家庭労働およびレジャーに振り分けて暮らしの豊かさを求めようとするとき、拘束される市場労働時間が長すぎれば、最適を求めることはできない。男女共同して仕事と暮らしのバランスをとることが豊かな暮らしへの道だとすれば、労働時間の短縮が前提となる。かつてオランダがそうしたように、労働時間の短縮は日本の重要な政策課題となるだろう。

生活文化とは「暮らし方」、それも「はたから見ている」と思われる暮らし方を指す。男女共同参画の時代に生きる学生諸姉には、新しい生活文化を紡ぐという気概を持って生きていくことを期待する。

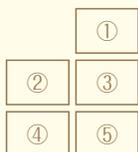
実践女子大学 生活文化フォーラム 第19号

平成27年3月10日発行

編集者 生活科学部生活文化学科
発行者 (ホームページ <http://campus.jissen.ac.jp/seibun/>)
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8918
FAX 042-585-8919
実践女子大学ホームページ <http://www.jissen.ac.jp>

〔編集企画〕協力・印刷所

日野テクニカルサービス株式会社
〒191-8660 東京都日野市日野台3-1-1
TEL 042-586-5062
FAX 042-586-8944



表紙作品

社会福祉法人 東京都社会福祉事業団
東京都七生福祉園

- ① 『三匹きのねこたち』
すずき よしえ さん
- ② 『花畑』
おがわ まさゆき さん
- ③ 『私とももちゃんとママゴトしているところ』
おおた あきこ さん
- ④ 『みんなのへ』(みんなの絵)
たかせ みちこ さん
- ⑤ 『りんご』
みねお まさたか さん

実践女子大学 生活科学部生活文化学科
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
042-585-8918 (fax. 042-585-8919)
<http://campus.jissen.ac.jp/seibun/>

